大学礼拝

説教集

第 15 号

2011

東北学院大学

大学礼拝説教集 第十五号 東北学院大学

表紙の絵について

東北学院大学の 3 キャンパスのチャペルには、それぞれ特徴のあるステンドグラスが取り付けられています。泉キャンパス礼拝堂のステンドグラスは、正面に一枚と左右両側面にそれぞれ四枚ずつ、全部で九枚あり、その九枚全体でイエス・キリストの生涯を描いています。土樋キャンパスのラーハウザー礼拝堂には、正面に一枚のステンドグラスがあり、キリストの昇天とそれを見守る 11 人の弟子達の姿が描かれています。

今回の表紙の口絵は、多賀城キャンパス礼拝堂の後方二階席の上方に取り付けられたステンドグラスで、創世記 1 章の「天地創造」を表わしています。混沌に向かって神が「光あれ」と言を発すると、闇の中に光があり、ビッグ・バンによって宇宙の創造が始まりました。そして、万物の始原としての神の言は、ヨハネによる福音書 1 章において、生ける言であるイエス・キリストによる万物の救済へと向かうことになります。

大学礼拝

説教集

第 15 号

2011

東北学院大学

目次

巻頭言　宗教部長　佐々木哲夫……4
二つの謎　理事長　平河内健治……7
新渡戸稲造先生　学院長（大学長）　星宮望……13
善き隣人として生きる　常任理事　宮城光信……18
旅人としての人生　仙台広瀬河畔教会牧師　望月修……24
苦しみから学ぶもの　仙台東一番丁教会牧師　保科隆……28
思い悩むな　白石教会牧師　井上末司……33
クリスマスの贈り物　宗教部長　佐々木哲夫……38
空中の権をもつもの　大学宗教主任　永井義之……43
主の乗船している船　大学宗教主任　野村信……47
心にわき出る美しい言葉　大学宗教主任　佐々木勝彦……52

キリストの手紙として　大学宗教主任　佐藤司郎……56
柔和な人　大学宗教主任　北　博……62
信じる者の希望　大学宗教主任　出村みや子……67
受け入れられた生　大学宗教主任　村上みか……73
神が共におられる　キリスト教学科長　原口尚彰……78
キリスト教は何を伝えようとするのか　経営学部教授　佐藤邦廣……84
窓を開こう！　経営学部准教授　松村尚彦……88
桜切るばか、梅切らぬばか　工学部教授　星宮　務……93
父なる神の眼差し　工学部准教授　長島慎二……97
ENGLISH CHAPEL SERVICE　教養学部教授　E・F・ゾンダーマン……106
ENGLISH CHAPEL SERVICE　宣教師・文学部教授　D・N・マーチー……109
編集後記　大学宗教主任　北　博……110

巻頭言

宗教部長　佐々木　哲夫

東北学院は、本年で一二五年目を迎えています。私立学校ですから、創立の理念や目的を示す「建学の精神」は重要です。過去の理念ということではなく、現在そして将来の歩みを方向づける羅針盤のごとき存在です。本学の規程集寄付行為の前文として「建学の精神」が記載されています。

東北学院の三校祖、押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダーは、東北学院の建学の精神を、宗教改革の「福音主義キリスト教」の精神に基づく「個人の尊厳の重視と人格の完成」の教育とした。その教育は、聖書の示す神に対する畏敬の念とイエス・キリストにならう隣人への愛の精神を培い、文化の進展と福祉に貢献する人材の育成を目指すものである。

東北学院の三校祖三人の名前が冒頭に記されています。押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダーの三人です。以前に「建学の精神」を英訳する機会が与えられたのですが、校祖という言葉を school ancestors と訳したものか founders と訳したものか、しばし考えさせられました。なぜなら、東北学院が仙台神学校として創立された一八八六年（明治一九年）の時の創立者は、押川先生とホーイ先生の二人だからです。三人目のシュネーダー先生が仙台に着任したのは二年後の一八八八年です。つまり、創立後の赴任ですから、正確に言うならば、founding には参加していないということになります。ですから、三人を表現するのであれば、founders ではなく school ancestors「校祖」のほうが正確ということになります。

しかし、考えさせられた理由はもう一つありました。それは、三人に共通して言えることですが、彼らは自分たちではなく、イエス・キリストを真の創立者として学校を作ったということです。換言するならば、聖書の言葉を土台として学校を作ったということです。聖書に次のような記述があります。

詩編一一九編一〇五節

あなたの御言葉は、わたしの道の光。
わたしの歩みを照らす灯。

一行目の「光」は、燭台に灯る火（lamp）を意味しています。イスラエルの神殿の七枝の燭台（メノラー）の火や家庭の燭台に灯る火を意味していました。燭台の灯は、神が自分たちと共にいることを象徴しており、また、その神が自分たちの歩むべき道を導くと確信していたのです。

二行目の「灯」は、光（light）を意味しています。日中の光、喜びで輝く顔、目の輝きなどの意味で使われています。また「命を与えられて生きるものは光を見るが（ヨブ三三・二八）、死んだ者はもはや光を見ることができない」（詩四九・二〇、ヨブ三・一六）との記述もあります。光（light）と命（life）が関連付けられています。聖書の言葉が、私たちを命へと導いてくれる光というのです。

さて、光と命という言葉を聞きますと、東北学院の3L精神（Life, Light and Love）を連想します。また、マタイ福音書五章の言葉「あなたがたは世の光である」も連想されます。後者は、大学の卒業礼拝の説教箇所にもなっています。イエス・キリストは「聖書の言葉は、その人の中だけでなく世をも照らす」と言明しているのです。lamp の光であるにせよ、light の光であるにせよ、光は燭台によって育まれたものです。

本書『説教集』が燭台の一部として貢献することを祈念している次第です。

二つの謎

理事長　平河内　健治

ヨハネによる福音書、第一二章二〇節～二六節

20さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。21彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。22フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。23イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。24はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。25自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。26わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

この箇所は榴ケ岡高校での礼拝で与えられたものですが、今朝私たちにも与えられた神の御言葉と信じ、神の声に耳を傾けてみたいと思います。ここには二つの謎ないし疑問を見出すことができ

ます。

一つは、ギリシャ人がイエスに会いたいということを弟子たちがイエスに取り次いだ時、イエスは直接ギリシャ人には会わず、ギリシャ人に対してではなく、弟子たちに間接的に応答していることであります。ギリシャ人は直接質問などをして、教えを請いたいと思っていたと考えられますが、ここでイエスはギリシャ人のところに赴こうとはしておりません。どうしてでしょうか？

第二の謎は、「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」というイエスの言葉は、常識的に考えた場合には、おかしいと思われることであります。通常、この世での命を愛することが求められ、命を憎むことは忌避されてしかるべきであるからであります。この逆説の意味するところは何かというのが、第二の謎であります。

第一の謎の「何故イエスは、訪ねてきたギリシャ人に直接応答をしようとしなかったのか」ということから考えてみたいと思います。イエスはユダヤ人のみを相手にすることにし、ギリシャ人は避けたのでしょうか？二十節にはユダヤ教の過ぎ越しの祭りの礼拝をするためにエルサレムに上ってきた人々の中に、何人かのギリシャ人がいたと記されています。礼拝者の群れの中にいたというわけですから、これらギリシャ人はユダヤ教に改宗した者か、ユダヤ教への共鳴者と考えられます。しかし、イエスの新しい教えにも関心をもち、弟子たちに「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」とイエスとの直接の出会いを懇願するくらいですから、大変真面目な人々であり、イエ

スがこれらギリシャ人との会見を拒(こば)む理由は見当たりません。

しかし、イエスは弟子たちにギリシャ人に会おうとは言わず、「人の子が栄光を受ける時が来た」と、ギリシャ人の懇請をいよいよ栄光の時、すなわち、神の子の死と復活による人類の救いの時が来たことの徴(しるし)であり、兆(きざし)であることを弟子たちに伝えます。イエスの十字架による罪の赦しによる救いの対象として、選民と信じられたユダヤ人も異邦人と称されたギリシャ人の区別はないことが暗示されております。つまり、ユダヤ人ではない私たちにも語られているイエスの言葉として、このことを受け止めることができます。イエスによる救いへの関心はあり、イエスの言動に真理を見出すことはできても、それでもなお、心から自らの罪を悔い、なかなか信じるまでに至らない自分の弱さを鼓舞する、イエスの神への信頼とイエスの神の子としての固い使命感とイエスのこの使命を果たす決意が感じとられます。「私を信じなさい。勇気を持ちなさい。」とイエスは私たちを促します。

イエスはさらに続けます。「一粒(ひとつぶ)の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」これはイエス自身のことを弟子たちに告げたものであります。いよいよ十字架にかかり、復活をし、信じる者に永遠の命をもたらす方として、永遠にこの世に君臨できることを示そうとしております。生命力が凝縮されている一粒の麦であるイエスは当時のユダヤ社会の権力者とそれにおもねる民衆と民衆の暴動を恐れ自らの地位を守ろうとするローマの総督府ピ

ラトによって、辱めを受け、冤罪により死刑にされます。イエスという一粒の麦は地に落ちて死ぬことになります。しかし、このことによって、人類がこの世での死を含めたすべてのこだわりから自由になり、神による贖罪という赦しによって人類の救いが約束されます。ユダヤ人もギリシャ人も日本人の区別なく、世界中で、人種や民族を超えて、多くの実を結ぶ約束がなされます。

イエスがギリシャ人に直接会わなくとも、間もなく実現されるイエスの十字架上の死と復活と昇天がギリシャ人にも伝わることの確信があればこそ、弟子たち、そして、ギリシャ人を含むすべてのイエスを信じる人々への愛の発言であったとみることができます。このことに心を留めたいと思います。

第二の謎は二十五節の「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」という常識には反すると思われる逆説の意味するところは何かというものであります。結論を先に述べれば、自分の命を愛する者とは、自分はすべてにおいて正しいとして、自分の命の救いのみにこだわり、他人の命は自分の都合のいいように利用するだけで、自分の命をすべてにおいて優先する人を言います。この世で自分の命を憎む人とは、自分の命はどうしても罪に染まってしまい、善をなそうとしても悪をなしてしまう、どうにもならない命を悔いる人であります。つまり、イエス・キリストの十字架上の犠牲によって、赦していただける、イエス・キリストに仕える生き方のできる人であります。神様はこのような人の命を大切にしてくれるとい

うのです。永遠の命へ至る道というわけです。

賀川豊彦というキリスト教伝道者であり、社会改革運動家、そして、小説家でもある人がいます。この方に、八十年前の昭和四年に発表した『一粒の麦』という小説があります。主人公の山下嘉吉は十四歳にして豊橋にある材木屋に雇われますが、五年勤めてから遊び癖が付き、金に困り、店の金をごまかしてしまいます。罪の意識をもちながらも「チチキトク」の偽電報を自ら打ち、実家に逃げ帰ります。酒乱の父は直後に倒れ、嘉吉は働き者の母を助け、父と障害者の弟、そして、幼い妹を養うことになります。姉二人はすでに芸者と娼妓に売られ、兄の佐助も傘屋に丁稚奉公に出たきりです。

嘉吉はこの間小さなキリスト教集会でキリスト教に触れ、改悛し、最後には、胡桃（くるみ）の木を植えて、農家が生計の資にする立体農業というものを提唱し、農業指導者として社会に貢献します。その間許婚となった芳江という女性と出会い、芳江は嘉吉が徴兵に取られている間、まだ嫁に入る前にもかかわらず、働き手として住み込みで嘉吉の家族に仕えます。しかし、嘉吉が除隊直前に芳江は過労で亡くなります。仏壇に納められた芳江の骨は立体農業の理想の地とされる土地に埋められ、そこに「一粒の麦もし地に落ちて死なずば唯一つにてありなん、もし死なば多くの実を結ぶべし」と書かれた碑が建てられます。

嘉吉の罪を厭（いと）い、罪に汚された命を憎み、キリストに縋（すが）る生き方と対比されるのが、兄佐助の生

き方です。佐助は資本家に搾取する権利があれば、無産者にも盗む権利があるとする思想に被(かぶ)れ、働くことを止め、盗みを働き、逃げる途中で追ってきた巡査を殺し、掴まり、牢に入れられます。自分の命を守るだけにイデオロギーで武装し、窃盗と殺人を犯す羽目になり、命を失ったも同然でした。ある霊感商法では、騙すことは正当化されます。信者でない人間は悪魔とみなされるからです。ここにも自分を捨てることのできない身勝手な生き方を見ることができます。

私たちに求められている生き方は、身勝手なイデオロギーに染まるのではなく、自分を守るだけの宗教団体の虜になるのではなく、自分を捨て、キリストの愛に倣うことであります。これがこの世での死の恐怖を克服し、永遠の命が得られる道であることを信じて、この世での命を燃焼させたいものと思います。

新渡戸稲造先生

学院長（大学長）　星宮　望

マタイによる福音書、第五章一三～一六節

13あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。16そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々があなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。

本日は、キリスト教信者であり、東北出身で日本を代表する国際人であり、かつまた著名な教育者である新渡戸稲造先生に学びたいと思います。

新渡戸氏は一八六二年岩手県盛岡市に、南部藩士の末っ子として生まれ、長じて、札幌農学校（現・北海道大学）の二期生として入学しました。学校創立時に副校長として滞在し、「少年よ、大志を抱け」の名言を残した有名なウィリアム・クラーク博士が帰国したばかりのときで、学内には

クラークの精神がみなぎっており、同級生の内村鑑三・宮部金吾などとともにキリスト教の影響が強かった環境で教育を受けることになりました。この三人は、競い合うように学問と信仰の道にはげみ、それぞれ日本を代表する教育者・宗教家に成長しましたが、その友情は後々五十年にもわたったということです。その後、新渡戸氏は、東京大学進学後、「太平洋の架け橋」になりたいとのおもいから、米国メリーランド州ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に進みました。約三年間の在学中に、農政学、農業経済学、行政学、政治学、ドイツ語・・・など広範囲に学びました。ボルチモア市はクエーカー派のキリスト教徒の多い都市で、新渡戸氏は、クエーカー教徒の集会によく出席し、その中に後の妻となるメリー・P・エルキントンと出会うことになりました。その後、札幌農学校助教授に任命され、ジョンズ・ホプキンス大学を中途退学して、日本政府からの三年間の官費出張としてドイツへ留学し、ボン大学を経てハレ大学より農業経済学で博士号を得て帰国し、札幌農学校教授に就任しました。このボン大学在学中に、ベルギーの高名な法学者ド・ラヴレー氏からの質問に対する回答として、執筆し一九〇〇年に出版したのが有名な「武士道」という著書でした。これは最初、英語で出版され、後に、日本語はもちろん、ドイツ語、フランス語、ロシヤ語などに翻訳され、世界中で読まれるようになりました。

そのいきさつは次のようなものといわれております（花巻新渡戸稲造記念館の冊子：「新渡戸稲造著『武士道』に学ぶ」に掲載された第一版序によります）。

ある日の散歩時、話が宗教の問題になった。「あなたの国の学校には宗教教育はない、とおっしゃるのですか」と尊敬する教授が質問した。「ありません」と答えるや否や、教授は驚いて足をとめ、「宗教なし！　どうして道徳教育を与えるのですか」と繰り返して言った。私は即答できなかった。私が少年時代に受けた道徳の教えは、学校で教えられたのではなかったから。私の正邪善悪の観念を形作っているいろんな要素を分析し始めて、これらの観念を私の中に吹き込んだものは「武士道」であることに気がついた。私がこの小著に取り組んだ直接のきっかけは、妻（メリー）が日本の思想や習慣についてその理由を度々質問したことによる。ド・ラヴレー氏と私の妻に満足な答えをしようと試みた・・・・と記されています。

その後、新渡戸氏は、京都帝国大学法科大学教授に就任、そして一九〇六年には、第一高等学校（現・東京大学）の校長に就任した。新渡戸氏四十四歳の時であります。国立大学ではキリスト教に関連することを発言することを控えなければならなかったが、一九一八年に東京女子大学が創立された時には、キリスト教大学の教育を担当することであり、特に、長年関心を持っていた女子教育に関与できることもあって、初代学長に喜んで就任することになりました。

ちょうどこの時期に第一次世界大戦が終結して国際連盟が結成されることになりました。日本は常任理事国になり、新渡戸氏は日本を代表して連盟の事務次長に就任することになりました。若い頃の夢であった「太平洋の架け橋」以上の大役を担うことになりますが、特別の権限を与えられて

いたわけではない立場で、道義的な力で紛争を未然に防ぐ努力をされました。彼は国際連盟事務次長として七年間の国際的な奉仕をおこなって、一九二七年に帰国することになりました。その後、日本は満州事変を起こすなど、国際的に非難されることが続き、ついに国際連盟を脱退するに至ったことは皆さんご存知でしょう。新渡戸氏は、一九三三年カナダ国ヴィクトリア市で七十二歳の生涯を閉じました。新渡戸氏のこれらの大きなご功績をたたえて、一九八四年には日本銀行券の五千円札に新渡戸稲造先生の肖像を選定することになったことは皆さんご存知でしょう。

ところで、私は、キリスト教の家庭に育ちましたし、東北学院中学校・高等学校で学びましたので、若い頃から、新渡戸稲造先生や内村鑑三先生を尊敬し、その著作物を手にとっておりました。大学院時代には、新渡戸稲造全集を購入して、そのいくつかを読んだことがあります。またその後、機会を見て、花巻市にある「花巻新渡戸稲造記念館」や、「十和田市立新渡戸記念館」なども訪問したことがあります。

また、大学に進学した時には、日本武道の一つである「弓道」の修練を積みたいと願って、弓道部に入り熱心に稽古をしました。二年半ほどで三段の免状をいただき、大きな大会で実質的に大将（オチという）をするまでになりましたが、伝統的に弓道では日本神道との結びつきが強く、日常的に神棚を拝むことなど神道の礼式が強要されましたので、キリスト教を信じるものとして修行を

断念することにしました。しかし、弓道を学ぶ中で、新渡戸氏が「武士道」の書物の中で説明しておられたことなど、言い換えれば、「礼」、「克己」、あるいは、「無心」などの日本武道の精神の一部を学んだこと、そして、「最後の勝敗を決する一射」というような弓道の試合における緊張する状況での呼吸法などを学んだことに感謝しています。

新渡戸氏は、日本の精神文化の粋ともいえる武士道に裏打ちされた正邪善悪の基準を持ちながら、主イエス・キリストの教えに従って奉仕の人生を歩まれました。いいかえれば、さきほど拝読したマタイによる福音書に記された、「あなたがたは地の塩である。・・・あなたがたは世の光である。」ということをまさに体現されたといえましょう。敬愛する信仰の先輩である新渡戸稲造先生の歩みに学びたいと思います。

皆様も機会があったらさきほど紹介した新渡戸記念館を訪れることや、「武士道」を読まれることをお勧めします。

善き隣人として生きる

常任理事　宮城光信

ルカによる福音書、第一〇章二五～三七節

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34近寄って傷に油とぶどう酒を注

ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』36さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」37律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

「人間はなんのために生きるのでしょうか」。この問題は人間の成長過程でおきる大きな問題で、悩まないで人生をおくる人はいないでしょう。そして、私達一人一人にとって、何のために生きるのか、生きる目的とは、よりよい人生を送るとはどのようなことかということを考えることは最も大切なことです。難しい問題で、すぐ答えは出なくても、その時、その時に真剣に考え抜き、毎日の生活を送ることが重要です。人生のたそがれ時になり、自分の一生を振り返り、「生きがい」を語る時、多くの人は、よい人生とは自分の好きなことをしたことではないというのです。自分は他の人にどれだけ尽くし、どれだけ喜んで貫えたかということの方が格段に多いということです。

主イエス・キリストは、ユダヤ人の律法の専門家から、「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」という質問を受けています。「どうしたら生きがいのある、正しい人生を送

ることができるのでしょうか」という質問に代えても大きな間違いはないでしょう。主イエス・キリストは質問した人が律法の専門家であることから、聖書に基づき、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また隣人を自分のように愛しなさい」という答えを引き出しています。

律法の専門家は質問をさらに続けます。「では、私の隣人とは誰ですか」。この問いについて話されたのが、聖書の中でも最も有名な、「善きサマリア人」の譬えと呼ばれる箇所です。善きサマリア人の物語の概略は――追いはぎに襲われ、半殺し状態で倒れていた旅人の側を、見知らぬように行き過ぎる祭司や律法学者に対し、同じ旅をしていたサマリア人はその人を憐れに思い、傷の手当をし、自分の乗ってきたろばに乗せ、近くの宿まで送り介抱し、宿の費用まで払ってやった――というものです。サマリア人は、当時、神の選民としてのユダヤ人からはさげすまされ、敵対関係にあった人だったということです。イエス・キリストはこのお話をした後、「祭司、律法学者、サマリア人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うのか？」と問われています。この答えは誰にも明瞭です。知識ではなく、ただ、「行って、あなたも同じようにしなさい」ということで、この譬えは終わっています。

私は大分前から、「善きサマリア人になること」を私の信条にしています。それは私のささやかな体験を通し、「これだ」と思い、得られたものです。私は、キリスト教を信じるクリスチャンになったのは25歳の時です。聖書に接したのは24歳位の頃です。それ以来、何度もこの物語を読んでいます。この物語に啓発され、「自分も善きサマリア人」となろうと決意して、貧しく食べる物にも事欠くネパールの無医村で医療活動をされた、有名な岩村昇先生という立派なお医者さんもおります。岩村昇先生についてのお話を本で読んだり、講演で聴いていたりしています。しかしながら、それは長い間、私にとっては単なる「物語」の域を出ることはありませんでした。

私が51歳の時でした。北フランスのリールという街での国際会議で研究論文を発表するため、途中ベルギーのブラッセル空港で経験したことです。その時、ベトナムからベルギーのゲント大学で勉強したいという一人の女学生に会いました。彼女は大学院で勉強するためにゲント大学へ行くというのです。初めてのヨーロッパだったらしく、私の後を追い、空港の税関で何をしたら良いのかを私に尋ね、私の教えるままに行動し、私を信頼し、ついてくるのです。よほど不安だったのでしょう。ブラッセルから私が行こうとしていたリールへは列車で、そのルートは北回りと南回りがありました。彼女が目的とするゲントは北回りの途中の駅です。私にとっては、どっちでも良かったのですが、日本から行く時に南回りルートを考えていました。夜遅くならないように、私も一刻も早

くリールに着きたいという気持ちでした。その女性とは、「残念ながら、私と行き先が違いますね」ということで空港でお別れしました。

しばらく日が経ってからのことと思います。この体験をふと思い出しました。私は聖書の物語に出てくる祭司や律法学者と同じ行動をしていた、ということにはっと気がつきました。最初読んだ時には、聖書に出てくる祭司や律法学者は、何て情が薄く、何て冷たい人達なのだろうか、と思いました。しかしそうではないのではないか。それぞれの人は優しいが、傷ついた人の面倒を見る時間がなかった。それ以上に彼らにはもっと大事だと思われる仕事があったからではないか。きっと行き先で仕事が待っていたのではないか、と思うようになりました。それは将に私が行ったことと同じだったのです。それ以来、私は「善きサマリア人になりたい」と思うようになりました。聖書を読んで、理解するまでに、実に四半世紀かかりました。

「善きサマリア人になりたい」と思うようになりますと、いろいろなチャンスを神様は与えてくれるものです。そして良きサマリア人になることは、決して人のためになるだけではなく、神様からいただいている自分の賜物を最も生かすことであり、また神様に仕えることでもあるように思います。困っている人、苦しんでいる人、怪我をしている人、あるいは悩みの中にある人が、隣人と

して最も近い、自分の兄弟、両親、最も親しい友人と考えてみたらどうでしょうか。

「善きサマリア人の法」（Good Samaritan law）という法律があります。その法律は、「災難に遭ったり急病になったりした人など（窮地の人）を救うために無償で善意の行動をとった場合、良識的かつ誠実にその人ができることをしたのなら、たとえ失敗してもその結果につき責任を問われない」という法律で、アメリカやカナダで施行されているとのことです。

皆さんの入学された東北学院大学は、建学の精神として、キリスト教を土台にしています。日本ではキリスト教の香りただよう、「善きサマリア人の法」を実現することは不可能に近いことでしょう。しかし、私は東北学院大では可能である、と堅く思っています。皆さんに心から望むことは、東北学院大学で学ぶ一人一人の皆さんの心の中には、「善きサマリア人の法」を完成して貰いたいということ、そしてこの法のもとに皆さんが勇気を持って行動して貰いたいということです。

皆さんの一人でも多くの人が「善きサマリア人」となり、大学生活を豊かに送ることを切に願っています。

「旅人としての人生」

仙台広瀬河畔教会牧師　望月　修

ペトロの手紙一、第二章一一節

11愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。

私たちは、この地上では、「旅人」であり、「仮住まいの身」である、と聖書は告げています。これは、しかし、私たちの人生の儚さ、あるいは虚しさを述べようとしているのではありません。そうではなくて、私たちの本国が天にあること（フィリピ三・二〇参照）を、言おうとしているのであります。

本国であれば、私たちの帰属する国、戸籍のある国のことになります。その意味で、「故郷」（ヘブライ一一・一六参照）と言ってもよいでしょう。いずれにしても、私たちの帰る所です。それが、天、つまり神の御もとにあるのです。そこから、私たちは、この地上に、今は遣わされており、それぞれには使命が与えられているのだ、ということです。

東北学院は、ミッションスクールと呼ばれる場合があります。外国のキリスト教団体が設立した学校ということからです。今日では、経済的にも人材的にも独立していますから、キリスト教主義学校という言い方が適切でありましょう。しかし、この「ミッション」というのは、御存知のように、〈遣わされる〉というのが元の意味で、それが使命とか任務ということになったのです。

私たちの本国が天、神の御もとにあるというのは、そのような意味合いがあります。私たち自身が天にある本国からの「ミッション」を帯びて、この地上に遣わされている、ということです。したがって、その使命、任務が果たされたなら、本国へ帰還することになるのです。

ところで、本国が天にあれば、この地は異国の地であります。「天が私たちの祖国であるなら、この地は亡命の地でなくて何だろう」。これは、宗教改革者J・カルヴァンの言葉であります。亡命者の生活は、生易しいものではありません。本国であれば何でもないことであっても、亡命の地では様々な制約を受けます。まさに、「仮住まいの身」です。権利や安全の面でも、不安を抱えます。何よりも、祖国を脱出しているのですから、土台を失ってしまった生活です。内面にも激しい葛藤があるに違いありません。しかし、それらは、本国は天にあることを、私たちに思い起こさせるでありましょう。

私たちは、言わば、天の祖国を追われた亡命者であるのに、この地上を祖国だといつのまにか思

い込んでいます。亡命の地であるこの地上に、終の棲家を定めようとしています。そのことで、思い煩いを深めているようなところがあるのです。

イギリスの詩人ジョン・ミルトンの叙事詩に「失楽園」（一六六七年）があります。アダムとエバの堕落と楽園からの追放を描いて、神の道の正しさを描こうとしている書物で知られています。私たちが神に背いたために、私たちは天に帰ることができないでいるのです。本当の故郷を失っているのです。楽園喪失の状態にあるのです。

死んだら、みな天国に行くのだ、と思っているかもしれません。また、そういうことを、しばしば耳にします。ですけれども、私たち人間の誰かが、それが事実であると証明したり保証できるわけではありません。むしろ、事実は、私たちは、このままでは、決して神の御もとに帰ることができないでいる、ということです。そのもどかしさ、不安、あるいは焦りと言ったものが、今の私たちの現実を形作っているのではないでしょうか。実際、過度な競争、満たされることのない欲望、飽くことを知らない貪りが渦巻いている世界に、私たちは住んでいます。そういったものに、私たちは繰り返し振り回されています。そこでは、誰もが疑心暗鬼です。一寸先は闇の状態です。本来の目的や使命を見出すことができずにいます。これらは、本当の本国を見失った者の徴候ではないでしょうか。

しかし、聖書は、「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい」と告げます。聖書が、このように告げるのには、理由があります。それは、神の御子イエス・キリストによる救いがあるからです。楽園喪失の状態にある私たち人間に、神の御子は、本来、帰るべき所に、帰ることができるようにしてくださったのです。本国から追放され、楽園喪失の状態にある私たちに、仰ぐべき故郷を指し示すとともに、その故郷に帰ることのできる道を、それこそ身を挺して、つけてくださったのであります。主イエス・キリストが、「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネ一四・六）と仰せになっていることです。

この救い主において、私たちは、天の本国から、追放された者としてではなく、遣わされた者として、神から与えられた自分の使命を自覚し、その使命に忠実であることができるようにしていただけるのであります。ですから、そのようにされた者は、この天にある本国、つまり神の名誉が汚されることがないように、この地上において、神の栄光のために働こうとし始めるのであります。

祈り

天に本当の本国を持つ身として、あなたに対して責任ある生き方ができるようにさせてください。

「苦しみから学ぶもの」

仙台東一番丁教会牧師　保科　隆

ヨブ記、一章六〜一二節

6ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。7主はサタンに言われた。「おまえはどこから来た。」「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩き回っておりました」とサタンは答えた。8主はサタンに言われた。「お前はわたしのしもべヨブに気づいたか。地上には彼ほどのものはいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」

9サタンは答えた。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。10あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。彼の手の業をすべて祝福なさいます。お陰で、彼の家畜はその地に溢れるほどです。11ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うに違いありません。」

旧約聖書の中でも、ヨブ記はよく読まれているもの一つです。特に、文学者はヨブ記を題材にして小説を書いております。例えば、山本周五郎は一番最後に未完の作品として『あとのない仮名』を残しました。これはヨブ記から題材を取ったものと言われます。ヨブ記は、これを文学として読

んでも「世界文学の中の最高傑作」と言われます。

さて、ヨブ記が書かれた時代ですが、この書物の中に直接歴史的な背景につながる言葉は見出されないものの、だいたい紀元前六世紀のバビロン捕囚の時代以後と言われます。イスラエル民族は、神によって選ばれ愛されてきた神の民でありながら、紀元前六世紀に南王国ユダの亡国と捕囚という二つの大きな苦難を経験しました。そして、それ以後イスラエル民族は国を長年失いました。その中で神に選ばれた民の造る国がなぜ滅びるのか、という深刻な問いを持たざるを得ませんでした。そのような民族として受けた苦難が、このような苦しみの意味を問うヨブ記が生まれる背景にあると考えてよいでしょう。

ヨブ記は一つのドラマと考えられます。一～二章はドラマの序曲です。三章以後が本曲です。そして、四二章に終曲があります。まず、序曲でこのドラマの主題が示されています。特に一章ではヨブの人となりの紹介や、ヨブが家族と使用人に囲まれて幸せな生活をしていることなどについて記されます。それは、「東の国一番の富豪であった」（三節）と言われている通りです。ただそれだけでなく、ヨブは「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた」（一節）のです。神を畏れるとは、神を信じることと同じです。ヨブは、いつでも神の存在を心にとめ決して忘れるような事はありませんでした。ところがそのようなヨブに対して、次から次と災いが襲いかかります。これはなぜかと言えば、ヨブの生きている地上の世界でなく、天上の世界で神とサタンとが対話を

している結果として起こるのです。神が天上でサタンに語ります。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上には彼ほどのものはいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」。（八節）すると、サタンが答えます。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか」。利益もないのにとは、御利益なしにということです。つまり、サタンに言わせればいくらヨブが無垢で正しい人であり信仰深い人であっても、それは神からいただくご利益があるからであって、御利益がなくなれば必ず神を呪うに違いない、というのです。だからヨブの幸福のしるしであるその持ち物を全部奪い取れ、必ず信仰をなくすに違いない、というのです。この指摘は鋭いものです。日本では宗教と言えば、家内安全、無病息災、商売繁盛、五穀豊穣、合格祈願に安産祈願などみな御利益に結び付いています。もちろん日本だけの事ではありません。したがってここでもサタンは、そのような人間の根底にある御利益狙いの思いを見抜いているのです。信仰といってみたところで、みな御利益狙いの信仰だというのです。それ以外に信仰などないというのです。そして、そのようなサタンの申し出を神が許可されたので、ヨブに次から次へと災いと不幸が襲いかかってきます。

ヨブにどのような災いが襲ってきたのかは、一章一三節以下に記されます。ヨブは、すべての財産を失い、そればかりでなくその財産が保証してくれる地位も失いました。それはあっという間の出来事でした。つまり彼の幸福は一瞬にして取り去られたのです。しかし、それでもヨブは申します。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこへ帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたた

えられよ。このようなときにも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった」。（二一節）のです。そこにヨブの信仰がどのようであったか語られています。与えることも奪うことも、それをなさるのは神の自由であるとの信仰にヨブは立っています。ヨブの人生の主人はヨブではなく、神が主人であるとの信仰の告白こそ「主は与え、主は奪う」です。

今年の夏に、長年の念願がかない、ポーランドのアウシュビッツ強制収容所を見学する機会を与えられました。アウシュビッツの収容所の存在は、二十歳前後に読んだフランクルの『夜と霧』で知っていました。実際にこの書物に記されることが行われたとはとても信じられませんでした。第二次大戦中の一九四〇年にナチス・ドイツが、この収容所を建設しました。そして、まもなくこの収容所では入れない人々が出たために、すぐ近く、バスで五分ぐらいのところに別のビルケナウ収容所を建てました。アウシュビッツの一〇倍の広さがある施設です。そして、まさにビルケナウは人間を殺すことを目的とした施設です。今日ではかなりの部分が破壊されてしまい元の状態を見ることはできません。しかし、今でも貨車に乗せてヨーロッパの各地から運んでくるために用いられた鉄道の引き込み線がそのまま残されています。収容所の中に入ると線路が二つに分かれます。一本の線路はそのままガス室へと通じています。そして、老人、病人、妊婦、子供などは収容所の囚人として登録されることもなく一本の線路を貨車で運ばれすぐにガス室へ送られたのです。また、アウシュビッツの方は現在ポーランド国立博物館として管理され、この収容所で殺された人々の遺

品などを展示しています。ここでガス室に送られ毒ガスで殺されたり銃殺されたりした人々のほとんどがユダヤ人でした。ユダヤ人はただユダヤ人というだけで殺されたのです。「ユダヤ人は完全に絶滅させなければならない人種である」がナチス・ドイツの標語でした。一時間あまりの時間では十分に内部を見ることが出来ないのが残念でした。そして、アウシュビッツとビルケナウを見学しながらヨブのことがしきりに思い出されたのです。「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか」。（二章一〇節）この言葉はアウシュビッツとヨブの信仰を結びつけているように思えてなりません。

（二〇一〇、一一、八　土樋）

「思い悩むな」

白石教会牧師　井上末司

マタイによる福音書、第六章二五節

25「だから、言っておく。自分の命のことで何か食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

――「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな」と書き出されている――この箇所が聖書を手にしたことのない人からも知られているのは、よく心に響くからでしょう。ヨハネによる福音書に「あなた方には世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい（一六：三三）という御言葉があります。「苦難がある」から…、あるいは先行きに苦難が予測されるから、人は思い悩むのです。思い悩みが絶えないのです。が、苦難を知らないお方ではなく、誰よりも人の苦難をよく御存じで、「あなた方には世で苦難がある」と仰せられるお方がここで『なぜ、思い悩むのか』（二八）、『思い悩むな』（三一、三四）と繰り返し、繰り返し仰せられるのです。しかも、ただ人の苦難をよくご存じというだけでなく…、その全部を私

たちに代わって十字架上に担われたお方です。それゆえに、一連の御言葉はとりわけ重く響くのです。

私たちの聖書では、この段落に「思い悩む」（二五、二七、二八、三一、三四ａ、三四ｂ）という言葉が六回数えられます。が、――重複を避けたのか、私たちの聖書では省かれていますが――原文では冒頭の一節にもう一回記されていて、わずか十節の（この）段落に都合七回（従って、ほとんど節毎に）「思い悩むな」という言葉が繰り返されているほどです。そのことが、人は誰も尽きない思い悩みを抱え、体と命をすり減らしていることを如実に示している、と言ってもよいかもしれません。どなたにも親しい〝種蒔き〟の譬えがあり、その説き明かしが後に続いて…、「茨」に落ちた種をめぐって、それが実を結ばなかった訳を「この人たちは御言葉を聞くが、この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろの欲望が心に入り込み、御言葉を覆い塞いで実らない」（マルコ四：一八、一九）と述べています。そこにも、今日の聖書の「思い悩み」と同じ字の「思い煩い」という言葉が見当たります。マタイによる福音書では「世の煩い」（八：一四）、ルカによる福音書では「人生の思い煩い」となっています。何であれ、様々な思い悩みに心をすり減らして生きている者に、「信仰の薄い者たちよ」（三〇）と呼び掛けることによって、思い悩みが何よりも信仰に起因していることを示唆しているのかもしれません。ともあれ、「自分の命のこと、自分の体のこと」で思い悩むのは、まことに私たちの偽らない在りようです。「あなたがたのうち誰が、思い悩んだ

からと言って、寿命をわずかでも延ばすことができようか」（二七）と続いている一節もまた、私たちの心に響くものです。重く重く響くのは、思い悩みから発する延命の企てや努力が、外見の華々しい姿に似ずに、内実は全く虚しいこと ―― 己の力に対する確信が無残に破れて行かざるを得ないこと ―― に気付いているからです。もう三十年余以前のものですけれども、（牧師には必読の）注解書があります。その中で、〝この言葉は、緊急の場合には、心臓移植手術さえ行って人生を著しく長くすることのできる時代にあっては、…鋭い輪郭を失ったと言えよう〟と時代に即して説かれ、さらに〝しかし、全ての生にその限界を設ける方を指し示す言葉として、それは反対に、生命を長くするための人間の諸努力 ―― それは、死ななければならないという悲劇と戦っているばかりでなく、死ぬことができないという悲劇を強めている ―― の悲劇についての、極めて重大な指摘となっている〟（ＮＴＤ ｐ、２１５～６）と説き明かされています。因んで最近の潮流を言えば、臓器移植に対する制限が緩和され、頻繁に移植手術が行われるようになりました。それによって、いくばくの延命ができるようになったのかもしれません。しかしもう一方で、〝安楽死や尊厳死〟がいつも問題になるのです。死の恐怖や死そのものによる悲劇が多少解消されたことと引き換えに、今度は死ねない悲劇を強めているのです。この皮肉を思えば、人はいかにも思い悩みの尽きない者と言う他ありません。

この思い悩みに心身をすり減らすことなく歩むことを勧めて、「だから、明日のことまで思い悩

むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」（三四）と言い…、そして、その日その日を喜びと感謝をもって生き、その時々に与えられる課題に苦労しながら、しかし予測不能の未来を思い悩むことなく歩むことを勧めて、「空の鳥をよく見なさい。…野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」（二六、二八）と言うのです。これらの句は、私たちを創造信仰の深みへと導くのです。ここで、私たちは天地創造の物語において万物が造られ、それらが神様によって「良しとされた」（創世記一：二一）こと…、併せて――「神はそれらのものを祝福し…」（創世記一：二二）と――祝福が与えられていることを、思い起こす必要があります。神様が「空の鳥を養い」、「野の花をさえ着飾らせてくださる」のです。それを喚起され、「まして、あなた方にはなおさらのことではないか」（三〇）とイエス様は仰せられるのです。〝御言葉は、私達を創造信仰の深みへと導く…〟と言ったのは、このことです。神様が「なおさらのこと」をなさるのは、「神は御自分に象って人を創造された」（創世記一：二七ａ）からです。ただ、そのゆえに…です。だから〝神様が空の鳥、野の花以上の「なおさらのこと」をなさって下さらないはずがない〟というのです。そういう訳で、人の奥深い、尽きない思い悩みは、神様の創造に対する無頓着と無関心による、と言う他ないのです。

そこで、イエス様は「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」（三三ａ）と…、さらに「…そうすれば、これらのものは皆加えて与えられる」（三三ｂ）と仰せられるのです。思い悩みを取

り除かれた人は、ただ「神の国と神の義」を求めることに集中し、必要なものは全て与えられると知るようになるのです。自分に係わる全ての思い煩い、そして心遣いの奥底に潜む、自分中心の生き方が方向転換させられ、神様の御心を求めて歩むようになるのです。

「明日のことまで思い悩むな」(三四)は、ある訳では〝明日のための心配は無用です〟(新改訳)となっています。〝明日のための心配は無用です〟とおっしゃられて、私たちの思い悩みを全部引き受けて下さるお方がおられるのです。それを信じて〝今日、一歩踏み出すように〟促しているのです。今日、一歩踏み出すように…。二歩目は保証されておらず…、三歩目に至っては全くどうなるの分わかりません。が、一歩、とにかく一歩踏み出しさえすれば、今さらながらに神様が「なおさらのこと」をなさって下さっている、と知ることになるのです。それに促されて、次の一歩を重ねて行けばよいのです。

「クリスマスの贈り物」

宗教部長　佐々木　哲夫

マタイによる福音書、第二章七～一一節

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

＊

赤ちゃんが生まれたという知らせが入ると、最初に多くの人の思うことは、男の子か女の子かなど赤ちゃんのことであり、また、どんな贈り物をしようかということであります。約二千年前、イエス・キリスト誕生のときもそうでした。マタイの福音書に記されている学者たちは、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」とユダヤの王ヘロデに尋ねております。

彼らは、赤ちゃんがユダヤ人の王として生まれたことをはっきりと認識しており、黄金、乳香、没薬の贈り物を携えてきたのでした。

ところで、どのようにして、占星術者たちは、赤ちゃんの誕生を知ったのでしょうか。彼らは「東方でその方の星を見た」と証言しています。例えば、十七世紀初頭、天文学者ケプラーは、この聖書の記述を、木星と土星が魚座で会合した現象だったと考えました。古代バビロニアなどでは、木星は偉大な幸運を告げる星、土星はユダヤ人の神について告げる星、魚座は、地中海海岸の国を意味していたので、占星術者たちは、「ユダヤ人の中に神のごとき有力な王が生まれた」と解釈し、巡礼をかねてエルサレムに旅してきたと想像されます。

いずれにせよ、彼らは、贈り物を携えていました。家に入ってみると、幼子は母マリアと共にいます。彼らは、ひれ伏して拝み、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げたのでした。

＊＊

さて、最初のクリスマスの夜に献げられた贈り物は、黄金、乳香、没薬だけではありません。それよりもはるかに貴重な贈り物が献げられました。すなわち、神の子であるイエス・キリスト自身です。イエス・キリストの誕生自体が、神から私たちに与えられた贈り物だったのです。

イエス・キリストの誕生について、祭司長や律法学者たちは、預言者ミカの言葉を引用し、「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前

から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となる」と説明しました。私たちは、本日、預言者イザヤの言葉も参照したいと思います。「多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。」すなわち、何人かの旧約聖書の著者たちは、はるか以前に、救い主の誕生を告げていたのです。

さらに、イエス・キリストの死後、十字架の生涯を見届けたヨハネは、クリスマスの出来事を簡潔に記しています。「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」イエス・キリストの誕生、それは、神から私たちに与えられた無償の贈り物、愛の現れでした。

＊＊＊

さて、無償の愛の贈り物、贈与の理念は、最初のクリスマス以降、キリスト教の重要な価値観となり、また人々の生きる根本的な動機付けとなりました。

もう百年以上昔のことですが、大阪の農学校に学ぶ一人の青年が在学中にキリスト教徒になりました。農学校卒業後、和歌山県庁に勤めるのですが、日露戦争時代の非戦論争に巻き込まれ、彼は職を辞し、神学に転じることになります。その後、牧師となり、農業指導など社会活動に参与し、

やがて、農民運動を主導して行くことになります。彼が、一九〇九年（明治四二年）に東北学院神学部を卒業した杉山元治郎です。賀川豊彦と共に農協（今日のＪＡ）を創設したことなどについて、高等学校『日本史Ｂ』の教科書に掲載された人物です。東六番丁教会や小高教会の牧師の働きにおいて彼を支えていたものは、イエス・キリストに倣う無償の愛を共に生きる人々に分かち合うとの姿勢だったと表現することができます。それは、特に、小高の農民たちをして「無給の農業指導員」を得たとの共感を与えたほどです。

このように、キリスト教の理念である無償の愛の贈り物を実践した人物の例を挙げるならば、古今東西、限りない数の人物を挙げることが出来ることでしょう。彼らに共通している根本理念は、神がイエス・キリストにおいて示した無償の愛に倣うことだったのです。

＊＊＊＊

さて、必要としている人々に無償の贈り物を献げるという価値観は、最初のクリスマスにおいて、目に見える形、イエスキリストとして神から私たちに与えられた贈り物です。爾来、バザーなどにおいて物を献げる、教会や社会鍋に献金する、さまざまな分野における神の働きに生涯を献げて参与する、すなわち献身するなど、多くの愛の贈り物が二千年の歴史にわたって献げられてきました。

二〇一〇年、東北学院大学のクリスマス礼拝に私たちは招かれています。私たちもまた世界の多くの人々と共にクリスマスの恵みを共有し、実践するものでありたいと願います。

『受けるよりは与える方が幸いである』　（使徒言行録二〇章三五節）

「空中の権をもつもの」

大学宗教主任　永井義之

エフェソの信徒への手紙、第二章一節～六節

1さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。2この世を支配する者、かの空中に勢力をもつ者、すなわち、不従順な者たちのうちに今も働く霊に従い、過ちと罪を犯して歩んでいました。3わたしたちも皆、こういう者たちの中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、他の人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。4しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって5罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、――あなたがたの救われたのは恵みによるのです――6キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。

この聖書の個所は、以前は過ちと罪に歩んでいた者が神の憐れみによりキリスト・イエスと共に生かされる者となったことを述べています。その際、以前の生活を描写するにあたり、この世を支配し、空中に勢力を持ち、不従順な者たちに働く霊に従っていた生活であることを指摘しています。

すなわち、人間に働いて神に服従させず、むしろ欲望の赴くまま、心の欲するままにさせている力が働いており、悪の霊、サタンというべき神に敵対する者の虜になっている人間の姿がえがかれています。

ここで注目してみたいのは、二節の「かの空中に勢力をもつ者」という独特な表現です。以前の文語訳聖書では「空中の権を執る宰（つかさ）」とあり、口語訳聖書では「空中の権をもつ君」という表現で、いずれも分かりにくい言葉です。しかし文意は明らかで、私たち人間を支配し、がんじがらめにして神に従うようにさせない力を指していることは間違いないと思われます。原文にあたってみますと、「空気の権威の支配者」という表現です。もうすこしパラフレーズすれば、空気というものが持つ権威を支配する者ということでしょうか。

さて、「空気」という言葉ですと私たち日本人にピンとくることがあります。近年若者たちの間でＫＹという言い方がありました。これは「空気（Ｋ）が読めない（Ｙ）」という非難の意味をもった言葉でした。つまり、状況に敏感に適応して適切な発言、行動をするべきで、それができない人間はＫＹなのだということでした。バラエティのお笑い芸人たちが広めた言い方といわれます。古くは、一九七五年の「空気の研究」山本七平があります。以前読んだ記憶では、戦時中、戦艦大和の出陣を決める御前会議で参謀たちが状況の悪さや戦艦大和を出すことの意義をめぐって疑義があったにもかかわらず、「その場の空気」に逆らって反対意見を出すことはできなかったというエピソー

ドが印象的です。その場の空気を読んだ結果本当は正しいことであっても正しさを主張することなく、周囲の意見に従う形で流されることはよくあることです。その際に、人は無言の圧力に屈しています。ある「空気」がその場を支配し、それに抗することは容易ではありません。そして人の生き方全体が「空気」に支配され左右されることになってしまえば、エフェソ書が言うように神に敵対する生き方そのものになってしまうのは避けられません。山本七平もこの「空気」を大きな絶対権を持つ妖怪と言っていますが、人がその力に抗しがたいという意味では似たような事態を言い表しているように思います。

問題は、聖書の言う「空中の権をもつ者」ということと、日本人になじみの「空気を読む」ことから受ける妖怪の支配とは同じと考えていいのかということです。聖書の「空中」とは地上と天の間の空間を指し、古代の人々はここを天の力ある者らの領分、あるいは住まいと考えていたようです。そして神に近い絶対的な力をもって人をある方向へと規制するという意味では日本語の「空気の支配」というものと内容的には近いものがあるように思います。

ＫＹであってはいけないとの無言の圧力を現代の若者たちは感じています。空気を読むべきだというのは彼らを規定する行動規範として果たして正しい規範なのでしょうか。「空中の権をもつもの」に従って過ちと罪の中に死んでいた（一節～二節）とは、「空気の支配」に従って空気を読み、自らの判断と思考を停止している（＝死んでいる）わたしたちの姿でもあるのではないでしょうか。

神が恵みによってわたしたちをキリストと共に復活の命に生かしてくださったのは、死んでいるわたしたちを命へと移すことに他なりませんでした。「空中の権をもつ者」すなわち「空気の支配」を脱して神の自由な恵みのもとに生きることへと聖書はわたしたちを招いています。

祈りましょう。

憐れみ深い神、キリスト・イエスによって共に復活にあずからせてくださり、私たちを生かしてくださる救いの恵みを感謝いたします。どうか、私たちの歩みが神ならぬ者の支配に生きるのではなく、恵みの神の支配と導きに従うものでありますように。主イエス・キリストの御名によってお願いします。アーメン

（2010・5・31　泉キャンパス礼拝）

「主の乗船している船」

大学宗教主任　野村　信

マタイによる福音書、第八章二三～二七節

23イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。24そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。25弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。26イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とをお叱りになると、すっかり凪になった。27人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。

主イエスは、ガリラヤ湖のほとりにいる時、弟子たちに「向こう岸へ行きなさい」と命じられましたが、一人の律法学者は、「先生、あなたに従います」と言いながら従えず、一人の弟子は、父の葬儀を理由に断るという状況の中で、準備の出来た船の中に先頭を切って乗り込んだのです。すると、それを見て、弟子たちも後から従って乗り込みました。

主イエスが先頭に立って、向こう岸へ向かわれるとは、なんと心強い、頼もしいことでしょうか、

誰しも、皆、この人が一緒なら、喜んでついて行ける気がしてくるのです。

しかしこの日は少々事情が異なっていました。弟子たちが沖に向かって漕ぎだすと、先ほど抱いた不安が的中したのです。それは、にわかに黒雲が広がり、強い風が吹いてきたのです。ギリシャ語の原文の聖書には、見よ、という言葉が入っています。「見よ、大きな嵐が海の上に現れた」と書かれています。おそらく弟子たちは、「ほれみろ！だから言ったとおりだろ！ガラリヤ湖は、突然嵐が起きるのに、まったく！」と言わんばかりだったでしょう。大波と強い風で船が大きく揺れ、今にも転覆しそうになり、弟子たちは、恐怖のどん底に落とされたのです。

聖書の文面には、その時の様子が詳しく語られていませんが、弟子たちの慌てふためく様子は想像することは出来ます。しかし、この状況は、私たちに深いことを語っています。

すなわち、キリストに従うということは、必ずしも、安全で、災いのない生活が出来るということではないということです。むしろ、以前よりももっと大変で、文字通り、波風が吹きつけ、転覆しそうな危険、不安、問題が生じるということを暗示しています。弟子たちは、この時、この先生のいいつけに従ったら、ひどい目にあったという嘆きをもったことでしょう。

しかし、一方、当の先生はぐっすりと寝ていたのです。弟子たちが大騒ぎしているのに、この主（あるじ）は、眠りこけていました。普段、寝る間もなく忙しいので、大嵐に気づかないほど疲れて寝ていた訳ではないのです。これも深いことを示しています。

私たちにとっては、嵐で、今にも死にそうに見える状況にあっても、キリストの目から見れば、大丈夫だよ、心配しなくていいから、とそう告げてきているようです。私たちは、目の前の暗闇と大風、大波に、恐怖と絶望を感じますが、キリストは、そこで静かに眼を閉じて、落ち着いて、寝ておられた。そんなに慌てふためくことは、無いと言わんばかりです。

しかし、恐怖のどん底にいた弟子たちは、ついに先生に近づいていって、起こしたのです。そして、大声で叫んだのです。「主よ、助けてください。死にそうです」と。

それは、もう、絶叫に近い、叫びだったのです。彼らは必死だったのです。これも大切なことを意味しています。ここで、私たちは気付かなければなりません。すなわち、この弟子たちは、マタイによる福音書の4章で書かれていたように、キリストに従って以来、いつも驚くべき光景を目にしてきました。大勢の病気にかかっていた人々がいやされ、慰めを必要としていた人々が慰められ、悲しんでいた人々に笑顔がもどり、その語るところ、なすところどれも素晴らしい様子を見てきたのです。

しかし、この嵐の中で、初めて彼らは、「主よ、助けてください」と、叫んで、願い求めたのです。これまでは、傍らで眺めているだけでしたが、今、ここで、弟子たちは、まさに求める人になったのです。主に従うというのは、驚くような光景を目にしたり、素晴らしい教えに耳を傾けるだけではなくて、あなた自身の問題であると。あなた自身、祈り、願い、求めていく実存的なこと、自

分自身のこととして行動することであると、この時、弟子たちは教えられているのです。

いずれにしても、この時、この切羽詰った弟子たちに揺り動かされ、主イエスは、起きあがって下さいました。たとえどんなに人間たちがささいなことで願い求めても、主はそこで起きあがって、聞いて下さるということでしょう。

ただ、弟子たちにしっかりと言い聞かせています。「なぜ怖がるのか」。「何を恐れているのか」と。私が一緒にいるではないか。私はあなたたちと一緒にいるのに、まるでいないかのように、恐れ、おののいているとは、どうしたことか。「信仰の薄い者たちよ」と主は言っています。すなわち、私を信じなさい。私はいつもあなたたちと一緒にいるのだ。波風くらいでおびえるな、と主は教えています。

さて、今日のこの話は、主イエスと共に進んでいく船は、いつも揺れ動き、嵐に会うような不安や心配がある、と告げてきています。しかし、そのような出来事を通して、弟子たちは、学ばされ、訓練され、たくましく成長していくのです。可愛い子供には旅をさせ、多くの冒険を経て、一人前の、たくましい人間に成長してもらわなければなりません。

私たちも、それぞれ困難なことや、多くの課題をもっていますが、それは、さらに大きく成長し

ていくための試金石であり、ステップ台なのです。しかも、何よりも、困難や大変なことの、その奥に、何もしていないようにみえますが、私たちといつも一緒にいて、私たちを導くお方がいると、だから困難な時にこそ、この方に祈れ、願い、求めよ、と聖書は私たちに教えてきています。

私たちは、一人一人の「沖へ向う」人生の旅がありますが、いつも主イエス・キリストがいてくださる、ということを心に留めて、進んで行きたいと願います。

「心にわき出る美しい言葉」

大学宗教主任　佐々木　勝彦

詩篇、第四五章二節

2 心にわき出る美しい言葉
わたしのつくる詩を、王の前で歌おう
わたしの舌をすみやかに物書く人の筆として

つい最近、ルター著『心にわき出る美しい言葉』（金子晴勇訳、教文館）という書物が出版され、読む機会がありました。今日はこの本の内容ではなく、そのもとになっている詩篇四五を取り上げたいと思います。

詩篇とは、神殿などで実際に歌われた歌であり、そのことは詩四五・一の記録が示唆しているとおりです。この詩篇の内容は、同じ一節に「愛の歌」とあることから、さらに、二節以下の歌詞から、「王」と「王妃」の結婚を祝う歌であることが分かります。この詩篇は「詩篇中ただひとつ宗教的でない叙情詩の例」（A・ヴァイザー）と言われ、宮廷歌人が王の結婚式に際して作詞朗唱したものと考えられています。

このことからいくつかの問題が生じてきます。例えば、ではこの王とは一体誰のことなのかという歴史学的な疑問、あるいは「祈り」の歌であるはずの詩篇に、なぜこのような世俗的な歌が取り入れられたのかという疑問、さらに、七節において、「神よ」と呼びかけられているのは明らかに王であり、これは聖書の創造信仰に反するのではないかという宗教的な疑問などです。

実在の王としては、ソロモンやアハブ等の名前が挙げられていますが、いずれの説も聖書の中に決定的証拠は見いだせません。宗教的な疑問については、「メシア論的に理解された」という説明が一般的です。

この「メシア」について、皆さんの読んでいる『新共同訳聖書』の「用語解説」にはこう記されています。「『油注がれた者』の意で、旧約聖書では三九回用いられている。イスラエルでは『王』（サム下二・四）『祭司』（出二九・七）が、就任式のときに油を注がれた。後に『油注がれた者』は、正しい治世をもって国を治める理想的存在を示すようになり（イザ一一・一―一〇）、さらに神の決定的な救いをもたらす『救い主』を指すようになった。」

詩四五・八には、「神に従うことを愛し、逆らうことを憎むあなたに、神、あなたの神は油を注がれた」と記されています。このように「油を注がれ」、祝福された王は、「真実」と「義」と「公平」をもって治め、「邪悪」を憎み、虐げられた者を保護することが期待されています（詩七二・一―四、一二―一四を参照）。したがってこの詩篇四五で歌われている王の姿も、イスラエル王国

時代の「王の理想像」であると考えられます。

しかしここからさらに二つの問題が出てきます。ひとつは、ここに描かれている「王妃」つまり「花嫁」とはだれのことかという問いであり、もうひとつは、イスラエルにそのような「理想的な王」は本当にいたのかという問いです。イスラエルの歴史は、この「理想的な政治」からほど遠く、預言者と呼ばれる人々はその現実を鋭く批判し、ホセアは王制自体の廃絶を預言し（ホセ一〇・一五）、イザヤは理想的な王の到来を将来に託しました。これに応じてその「花嫁」も、現実のイスラエルというよりも、来るべきイスラエルあるいは「花婿」の到来する都「シオン（エルサレム）」と考えられるようになりました。

大切なのは、この時点で、つまり旧約聖書の中で、「王」も「王妃」も、それゆえ「花婿」も「花嫁」も、隠喩的に解釈されていることです。新約聖書にもメシアとその花嫁という隠喩がみられます（マタイ九・一五、二二・九、二五・一〇）。

ここで、先ほど引用した「解説」の続きを読むと、こうなっています。「新約時代の人々は政治的解放をもたらすメシアを待望していたが、イエスはそれを拒否し、十字架の死によって人々を罪から救うメシアであることを主張された。新約聖書は、イエスがこの意味のメシアであることを主張し、イエスに『キリスト（メシアのギリシア語訳）』という名称を付した（マタイ一・一、一六・一六）」。このように、キリストとメシアは同じ意味ですが、その内容理解の点でユダヤ教とキリス

ト教は違ったのです。同じく「油注がれた者」を待ち望みながら、キリスト教は「十字架にかけられたイエス」において、旧約聖書のメシア到来の約束が実現されたと考えました。

詩篇四五それ自体は旧約聖書の中にあり、ユダヤ教においても「メシア」の到来について語る「メシア詩篇」と理解されています。しかしキリスト教では、その約束は、十字架にかかり復活されたあの「イエス・キリスト（メシア）」において実現されていると解釈された結果、「王妃」であり「花嫁」であるパートナーも「新しいエルサレム」つまり「教会」と考えられました。

このように、詩篇四五はイスラエルの歴史を背景としながらも、その解釈には初めから「比喩的解釈法」が用いられていたのです。

最後にもう一度、詩篇四五を読んで、「メシア的解釈」の意味を味わってみましょう。

「キリストの手紙として」

大学宗教主任　佐藤司郎

コリントの信徒への手紙二、第三章三節

3あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です。

昨年私の読んだ本の中でもっとも印象に残っているものの一つが、オーティス・ケーリの『日本プロテスタント宣教史――最初の50年（1859―1909年）』です。ケーリはご承知のように、新島襄の友人であり、アメリカンボードの宣教師として、同志社をはじめとして、すぐれた足跡を残した宣教師です。この本は、日本伝道の最初の五〇年間を、宣教師の側から書いた貴重な記録であり、まさに名著ですが、不思議に訳されてこなかったものです。昨年、改革派教会の篤学の士の、丁寧、かつ誠実な翻訳によって、読めるようになりました。

この本を読むと、日本に来た多くの宣教師が、じつに熱心に教育に取り組んだことが分かります。宣教師来日後も禁教がつづいていたこと、また開教後も、教会を建て直接伝道をおこなうにはまだ

相当の困難があったことなども、そうした教育との取り組みをうながした要因ですが、それだけではなくて、むしろ教育をとおしての伝道という積極的な宣教活動が試みられたと考えてよいと思います。礼拝がささげられ、聖書を教える課目がそこに必ずもうけられていました。やがてミッション・スクールの多くが外国ミッション団体の手を離れ、自立していきますが、キリスト教学校が福音の宣教、伝道という大きな志のもとにはじまり、それが日本人に受けつがれて今日にいたっているということ、このことは、教会はもちろんのこと、何より私たち学校関係者が、忘れてならない、つねに肝に銘じておくべきことです。

＊

こうしたことを考えながら思い起こした聖句が、思い起こしたというより、与えられたといったほうがよいと思いますが、それが、いまお読みしたコリントの信徒への手紙Ⅱの一節です。

あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です。

冒頭の「あなたがた」というのは、言うまでもなく、この手紙の受け取り手である、コリント教会の人びとです。ですからパウロは、ここで、コリント教会を、あるいはその枝である人びとを、

キリストの手紙と呼んでいるわけです。まさに一つの手紙の中で、手紙という、まことに卓抜な、はっとするような比喩を用いて、コリント教会の人びとに、自分たちが何者であるか、さとらしめています。さきほどケーリの本に関連して、教育をとおしての伝道と申しましたが、キリストの手紙という教会の理解はひとりコリント教会、少し広げて一般に教会だけでなく、キリスト教学校にも、基本的に適用して差し支えないものだと思っています。私たちも、われわれは、キリストの手紙だと、自分たちを理解していい、理解しなければならないということです。

ご承知のように、コリントの教会は、決して模範的な、問題のない教会ではありませんでした。むしろ多くの問題をかかえ、パウロのあとに教会に入り込んできた、この手紙の後のほうで「偽使徒」というような言葉も使っていますけれども、そのような者たちに動かされて、パウロの使徒性を疑いはじめるなど、人間的に考えれば、教会と呼べないような状況にあったのです。しかしそのようなコリントの教会が教会であることをパウロは少しも疑いませんでした。教会をたんなる人間の集まり、人間の組織だとは、考えていなかったからです。

教会がキリストの手紙と呼ばれたとき、何よりも強調されてよいのは、これは、キリストが書いた、キリストが差し出した手紙であるということです。パウロは、「私たちを用いてお書きになった」と書いていますが、それは作者はキリストだと、自分ではない、人間の手紙ではない、生ける神の霊による手紙だと言っているのです。どんなに多くの問題をかかえていようが、この手紙、す

なわち、コリントの教会は、神に基づくとパウロは語っています。

さて手紙というのは一つの比喩です。この比喩で考えれば、それならどこへ宛てられているのかと問うてもよいことです。それは、ここには直接語られていません。しかしこの世へであることは間違いないことです。「公にされている」というのは、この世に宛ててという意味ととってもよいと思います。隠れようもなく、教会も、キリスト教学校も、この世にあって、この世に知られており、二節の言葉を使えば、いわば「読まれている」のです。聖書をこの世は読むわけではない。そうではなくて、この世は、教会という、あるいはキリスト教学校という手紙を読むのです。そこに神を読みとっていると、いうことはできるのです。

＊

手紙の比喩を手がかりに少し申し上げてみましたが、その線で、もう一つ、問いを立てることが許されます。それは、その手紙はどういう手紙か、あるいは何がそこに記されているのか、ということです。教会とは何であるのか、キリスト教学校は何であるのか、私たちはこの世にあって何者なのか、それを知るためには、われわれはそれも問う必要があります。

その手がかりになるのは、「墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に書きつけられた手紙」というくだり、とくにこの後半の、「石の板ではなく人の心の板に書きつけられた手紙」という言葉です。

詳しい説明は不要だと思いますので、結論だけ、申します。そこには、律法ではなく福音が書き記されている、つまりキリストの手紙には、キリスト・イエスその方のことが記されているということです。

説教学者R・ボーレンが、来日講演で語ったことを思い起こすのですが、彼は説教を手紙になぞらえながら――テサロニケの信徒への手紙Ⅱに説教と手紙を並列して語っているところがあります――こう言っています、「愛の手紙は、業務上の手紙とは違ったスタイルで書かれます。おそらくわれわれの説教は、燃えるような愛の手紙であるよりも、あまりにも業務上の手紙に似ているのである」。「業務上の手紙」のような説教というのはまさにドイツの教会の説教の一面をついた言葉だと思いますが、それはともかく、キリストの手紙が業務上の手紙ということは、まさかないでしょう。教会だけでなく、キリスト教学校のわれわれの仕事が、業務としてなされているなら不幸です。キリストの手紙は、愛の手紙であり福音の手紙です。

この福音を、いまもし律法と対比させて説明するなら、「人の心の板」に書きつけられたという言葉、エレミヤ書三一・三三をただちに思い起こさせる言葉が、重要です。律法は目をもっているといった人があります（バルト）が、律法、すなわち、神の掟は、外側からわれわれのところに来る権威であって、律法と私たちのあいだの溝、その乖離は、ちょうどカントの義務論がそうであるように、永遠にうめることができません。律法がしかし、「心の中に」置かれているなら、私たち

がそれに従うことこそ、私たちの自由の行為になるはずです。心に記された律法は、私たちに、神は私たちを愛している、つねに私たちの味方だと語っています。それを私たちが受けとめたとき、そしてそれを受けとめつつ神を愛しかえし、隣人を愛するとき、それは神を愛さなければならない、隣人を愛さなければならないこととはならず、私たちは神を愛することが許されている、隣人を愛し、隣人と共に生きることが許されている、というようになるのではないでしょうか。

それが、福音的生活です。福音と、そこから押し出されてなされる福音的な生活、それがキリストの手紙に書き記されていることです。福音を語り、福音的生活が、学校の内外でなされるなら、そのこと自体において、私たちはキリストの手紙であるのです。またそのような福音的な精神が、ゆるぐことなく、私たちの大学をつらぬいているなら、またそれを保持する志が熱く燃えているなら、私たちのふだんの営みそのものが、たとえどんなにつたないものであったとしても、キリストの手紙として世にありつづけることができるのです。またそのように信じて共に歩みたいものです。

（二〇一一・一・一四）

柔和な人

大学宗教主任　北　博

マタイによる福音書、第五章三〜一二節

3「心の貧しい人々は、幸いである、
　天の国はその人たちのものである。
4悲しむ人々は、幸いである、
　その人たちは慰められる。
5柔和な人々は、幸いである、
　その人たちは地を受け継ぐ。
6義に飢え渇く人々は、幸いである、
　その人たちは満たされる。
7憐れみ深い人々は、幸いである、
　その人たちは憐れみを受ける。
8心の清い人々は、幸いである、
　その人たちは神を見る。

9 平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
10 義のために迫害される人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
11 わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

今日は有名なイエスの山上の説教の意味を、旧約聖書との連続性を視野に入れながら読み直してみましょう。五節に「柔和な人々は、幸いである、／その人たちは地を受け継ぐ。」と言われていますが、ここは詩篇三七編一一節の「貧しい人は地を継ぎ」からの引用です。なぜ「柔和な人々」＝「貧しい人」なのでしょうか。詩篇三七遍一一節で「貧しい人」と訳されている語は、民数記一二章三節では「謙遜」と訳されています。このヘブライ語（ここでは形容詞のアーナーウ、名詞ではアナワー）は、元来「よくしなう」「よく曲がる」と言う意味ですが、転じて「曲げられる」すなわち「抑圧された者」、そして「曲げられても折れない」すなわち「抑圧や苦難を耐え忍ぶ者」という意味になりました。そこで新共同訳聖書では、詩篇三七編一一節で「貧しい者」（ヘブライ語

では複数形のアナーウィーム）、それを引用しているマタイによる福音書五章五節では「柔和な人々」（ギリシア語でやはり複数形のプラエイス）と訳されているのです。

詩篇三七編は、「ハシディーム詩篇」と呼ばれる一群の詩篇の一つです。ハシディームとは神の慈しみ（ヘセド）にすがって生きる人々、それにすがって生きるしかない人々のことです。この言葉は、この詩篇の中では二八節に出て来ます。背景として、迫害状況があったと言われています。抑圧される中で、自らを「貧しい者達」（アナーウィーム）、「神の慈しみに生きる者達」（ハシディーム）、そして「主に従う者達、あるいは神の恵みの業に生きる者達」（ツァッディーキーム、二九節等多数）と自覚した人々は、抑圧に対して沈黙して神を待望し、将来に望みを託しました（七節）。繰り返し言われる「地を継ぐ」と言う表現は、神から配分された土地である「嗣業」の地の正当な権利が守られる、と言う意味です。抑圧されても苛立たず、主に望みを置き、無垢であり、平和の人であること（一八節、三七節）、それがここで勧められている姿勢です。

このような、理不尽な抑圧に対しても自らは手を下さず神の手に委ねるという精神的態度は、その後新約聖書に引き継がれ、「柔和な人々」への幸いの宣言となるのです。マタイによる福音書五章に戻りますと、ここで幸いの宣言を受ける人々はやはり理不尽に抑圧され、正義を渇望し、心清く、平和の人で、迫害の中に置かれています。ついでに言いますと、平和のメシアがろばに乗ってやって来ることを預言しているゼカリヤ書九章九節で「高ぶることなく」と訳されている語も、アー

ナーウと同系統のヘブライ語です。このように、神への信頼と待望の生は、旧約聖書と新約聖書を結ぶ信仰の在り方と言えましょう。

ここでもう一度民数記一二章三節に戻りますが、モーセはなぜアーナーウであったとされているのでしょう。ここのアーナーウは、我を通さずに物事に柔軟に対応し、腰が低く、したたかに、またしなやかに振舞う人というほどの意味でしょう。新共同訳はそれを「謙遜」と訳していますが、ここで問題になっているのが単なる礼儀やマナーの類ではないことは、言うまでもありません。モーセは申命記三四章一〇節では「預言者」と呼ばれていますが、民数記一二章でのモーセの振舞いは、有無を言わせず神の意思を告知する預言者的在り方とは少し違うのではないでしょうか。これに先立つ一一章では、荒れ野の放浪の中で飢餓に苦しむ民が不満を爆発させ、それに端を発してモーセの指導者としての適格性が問題になり、批判は更にモーセの私生活へと向けられます。それに対して一二章で神はモーセの適格性を肯定し、「口から口へ、わたしは彼と語り合う／あらわに、謎によらずに。／主の姿を彼は仰ぎ見る。」（八節）とまで言います。モーセはなぜ神の姿を仰ぎ見ることが出来るのでしょう。それは彼のアナワー、つまり自分を低くして、忍耐強く、また粘り強く物事に対応しようとする、彼の振舞いが神に是とされたためではないでしょうか。マタイによる福音書五章八節にはこう書かれています。「心の清い人々は、幸いである、／その人たちは神を見る。」

このような振舞い、すなわちへりくだって粘り強く対応し、最後は権力的に物事を解決するので

はなく、神の裁きに委ねて将来に望みを託すというような振舞い、これを預言者的在り方に対して黙示的在り方と呼ぶとすれば、黙示的在り方こそが旧約聖書から新約聖書へと注ぎ込まれる聖書の信仰の一貫した流れなのではないでしょうか。曲がらない枝は折れ易いが、よくしなう枝は折れない。このことは、特にいろいろな意味で厳しさを増しているように見えるこの時代に、肝に銘じておくべきことではないでしょうか。どのような時代にも、常に将来に希望を託して、粘り強くしたたかに物事に対処していきたいものです。

「信じる者の希望」

大学宗教主任　出村　みや子

ローマの信徒への手紙、第八章一八節～二五節

18現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。19被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。23被造物だけでなく、〝霊〟の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。24わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。25わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

キリスト教では信仰・希望・愛の三つを最も重要とみなしており（コリントの信徒への手紙一一三章一三節）、キリスト教的生き方にとっては日々の実践において神の約束を信じて希望を失わず、互いに愛し合うことが大切にされています。しかし心を痛めるような事件が日々報道され、自分の思うように行かないことが多いストレス生活を送っている現代人にとっては、このことを実感することは難しいかもしれません。つい先日には十月の連合総研の勤労者短間調査で、「今後一年間に失業する不安を感じる」という人の割合が二〇代で32・9％になり、過去最高になったことが広く報道されました。就職が厳しく、非正社員で働く割合も多い若者に雇用不安が広がっているとのことでした。そのような厳しい社会情勢の中を生きるわたしたちですが、今朝の大学礼拝では絶えず信じ、希望を持つべきことを告げる聖書のメッセージについてひと時ご一緒に学びたいと思います。

今朝選んだ聖書の箇所は、この世の中の苦しみが人間だけではなく、この世のすべての存在に及んでいることを告げています。パウロは一九節で「被造物は虚無に服している」と述べ、二二節でも「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」と告げています。旧約聖書の創世記には、原初の人間であるアダムとエバが神の禁令を破って園の果実を食べたことから、人類に労働や出産の苦しみに加えて死が入ったことが記されており、また最初の兄弟殺しのエピソードを伝えるカインとアベルの物語には、アベルの殺害

によって流された血によって大地までもが呪われたことが告げられています。

このような人間観、世界観は実は聖書に限ったことではありません。ギリシア神話によく親しんでいる方なら、例えば古代ギリシアの有名なパンドラの物語にも同じような記述があることを思い起こすでしょう。意図せずに災いを招くことを意味する慣用表現として「パンドラの箱を開ける（open Pandora's box）」という表現がしばしば本やテレビなどで使われますが、その起源となった物語です。ヘシオドスが伝えるところによれば、パンドラとは古代ギリシアの主神ゼウスがこの世に最初に生み出した女性の名前であり、広辞苑ではこのパンドラについて、「ギリシア語で神々から「すべての賜物を与えられた女」の意。ギリシア神話に見える地上最初の女。天の火を盗んだプロメテウスを罰するためにゼウスがヘファイストスに造らせ、贈り物としてプロメテウスの弟エピメテウスに与えた」とあります。ゼウスは、人類に味方して火を盗んで人類に与えたプロメテウスを罰した上に、その弟エピメテウスと人類にも復讐をしたということですから、聖書の神とは異なり、古代ギリシアでは非常に人間的な性格を備えた神々が受け入れられていたことになります。さらにパンドラの箱については、ゼウスが神々に命じて美しさや機織りの技術に加えて、限りない憧れと欺きの心を備えた女を粘土で作らせ、プロメテウスの弟エピメテウスに妻として与えた際に、あらゆる災いを封じ込めた甕を一緒に人間界に持たせてよこしたと語られています。西欧の長い歴史の中で、人類にはなぜ様々な災いや不幸があり、死の運命があるのかを説明する原因譚としてこの物

語が広く語り伝えられる中で、台所で水やオリーブオイルを貯蔵しておく大きな甕から、いつの間にか女性が手にする小箱に変わって、「パンドラの箱」として広く流布するようになりました。パンドラがこれを絶対に開けてはならないという禁令があるにもかかわらず、中身が見たいという欲望をどうしても抑えきれずに甕の蓋をあけてしまったため、中に詰めてあった数々の災いや不幸が飛び出してしまいました。彼女が驚いて急いで蓋をしたために、中には希望だけが残ったという話です。希望を持つということは、聖書では信仰や愛と並んで最も重要な事柄とみなされていますが、古代ギリシアでは人類に対する罰として与えられた甕に詰めてあった数々の災いや不幸の一つですから、よいものとはみなされていなかったことがわかります。実際古代ギリシアの詩の中には、希望は当てにならないものの表現として「あだな空しい希望」という言葉がよく見られます。

パウロは一九節で「被造物は虚無に服していますが」と述べ、二二節でも「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」と告げています。このパウロの言葉をわたしたちが否応なしに痛感させられるのが、愛する者、親しい者との死別を経験した時です。愛する者の突然の死に接してしばし言葉を失った瞬間を経験したことが、学生の皆さんにも既にあるかもしれません。教員にとっては将来の希望を抱いて熱心に学んでいた学生が健康を損ね、亡くなってしまう場合、本人の無念さやご家族の悲しみを思うと言葉が出ないのです。ちょうど一〇日ほど前の一一月一一日にキリスト教学科四年の郡山裕太君が、将来牧

師になるという夢を抱いたまま、病のために亡くなりました。彼が所属していた教会の牧師が葬儀の際に、その最後の時について詳しくお話し下さいましたが、いくつもの病と闘いながら教会員やご家族の祈りに支えられ、いつか元気になって人の痛みのわかるよい牧師になるという希望をずっと持ち続けていたとうかがい、涙にくれていた参列者は、告別式の場で読まれた聖書のみ言葉や讃美歌にせめてもの慰めを得ることができました。

普段わたしたちは全く意識していませんが、聖書は、人生がある意味ですべての希望を一瞬にして失わせるような出来事との戦いの場であることを告げています。しかしパウロは、そのような人生の中で信じる者には同時に確かな希望があるのだということを力強くわたしたちに伝えています。パウロは二〇節で「被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています」と述べており、それはいつか滅びから解放される救いの時が来るからだと告げています。また二二節以下でも人間のみならず、この世のすべてのものがうめき、苦しんでいるが、それはいつか「体が贖われることを待ち望む」いわば産みの苦しみであって、「わたしたちはこのような希望によって救われているのです」とはっきりわたしたちに告げています。聖書は最後の敵である死すらも超える復活の希望を抱くことが信じる者たちに許されていることを、イエス・キリストの十字架の出来事を通じてわたしたちに指し示しているのです。様々な出来事が待ち受ける社会にこれから船出する学生の皆さんには、ぜひ聖

書の伝える確かな希望のメッセージについて、心に深く覚えておいていただきたいと思います。

「受け入れられた生」

大学宗教主任　村上　みか

ローマの信徒への手紙、第三章二一節〜二四節

21ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。22すなわちイエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。23人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、24ただイエス・キリストによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

何年か前のことです。私は授業の中で、宗教改革者のルターが若き日に大変な苦悩をしたという話をしました。当時、ルターは修道士で、本来なら人よりも優れた宗教性や道徳性を身につけていなければならないはずなのに、自分は少しも優れていないと思っていました。それどころか、いくら優れた良い人間になろうとしても、なれない。良い人間になろうと努力すればするほど、そうなれない自分がはっきりと見えてくる、こんな自分は地獄に落ちるのではないか、自分には人として生きる価値がないのではないか、そう悩み続けたルターの話です。

授業の終わりに書いてもらったレポートを読んで、私はこのルターの苦悩に共感した学生が多くいたことを知りました。そして、とても嬉しく思いました。自分を見つめる厳しい視点とそこから目をそむけない謙虚で純粋な心をもった若い人たちがいることは、素晴らしいことだと思ったからです。

私たちは、日々の生活に追われて、なかなか自分の現実に向き合うことをしませんが、何かの折に自分に目を向け、観察すると、それはそんなに良いものでないことに気づくでしょう。そして、この自分の現実に気がついた人間は、それをどうにかしたいと思うでしょう。ルターもそうでした。彼は良い人間になろうと努力し続けました。しかし、どうしてもなれないのです。聖書の教えに従おうとしながら、自分は十分に神を愛していない、十分に隣人を愛していない、敵までも愛すことなど自分には出来ないと、彼は悩み続けるのです。そのような彼を救ったのは、同じ聖書の言葉でした。前述の聖書の箇所には、人間が皆、罪の中にあると記されています。人間が人間である以上、皆、罪を犯す弱い存在であるというのです。自分のことをまず考えてしまう自己中心的な、狭い心しかもたない愚かな存在であるということです。そして、そのような人間は、どのようにあがいても、どのように良い人間になろうとして努力しても、無理である、というのです。そのような人間がなしうるのは唯一つ、自らの弱さを認め、自らの限界を知り、そして赦されることを知ることなのです。二三節以下にこのように記されています「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっ

ていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」・・・人は罪を犯したにも関わらず、神の恵みにより無償で義とされる、良くないにも関わらず、何もなかったかのように良しとされる、赦されて、もう一度生きるようにとされる、というのです。良くないにもかかわらず、簡単に赦されるなんて、そんな都合のいい話があるものかと思われるかもしれません。しかし自らの深い罪を知り、苦しむ人間にとって、これは決して簡単なことではなく、大きな慰めであり、励ましであり、その人に生きる可能性を与える大きな恵みであるのです。

このような苦悩と恵みを若き日に経験した、ある青年がいました。彼は、良い教育環境を与えられて良く勉強し、学院大の英文科に入り、スポーツもできて、しかも人間的にとても優しい若者でした。傍から見れば、恵まれた環境のもとにすくすくと成長して、何の問題も無いように思われる青年でした。しかし、彼自身は自分について深く悩んでいたようです。彼は、自分を強く主張して、人を押しのけて生きていくタイプの人間ではありませんでした。逆に、人のことを配慮して、自分を人に合わせて行くタイプの人でした。それは彼の優しさから出たものでしたが、しかし彼自身には、それは弱さとして自覚され、彼はこの弱さに悩み続けたのです。自己主張が要求され、皆が自分を押し出して生き延びていくことに必死の厳しい時代であることも関係あるかもしれません。そ

のような中で、思ったようにことが進まないこともあったでしょう。彼は自らの弱さに悩み、自信を失って生きていたようです。その中で、彼はキリスト教に出会い、変えられてゆきました。自らの弱さを否定するのではなく、そして努力して強い人間になるのでなく、弱いままで自分が神に受け入れられ、生きるようにされていることを彼は知ったようです。そして、このように自分に生きる可能性を開いたキリスト教のことを人々に伝えようと、彼は二〇〇九年の四月にキリスト教学科に編入し、牧師になることを目指して、学びを続けていました。しかし、その志し半ばで、彼は先日、病のために、その生涯を終えました。苦悩し、模索し、ようやく道が開かれていった矢先の死に、多くの人は、その無念を思い、悲しみました。一緒に学んだ学生たちも、そして私たち教師も、まだ大きな喪失感の中にあります。しかし、彼のこの生き方は、私たちに多くのことを考えさせ、多くのものを残しました。自分と真正面から向き合い、その中で神の恵みを知り、生きようとした彼の姿は、私たちの中にいつまでも残り続けると思います。弱いままの自分を受け入れ、そのままの姿で存在していた彼は、皆から愛され、そして彼もまた皆を受けいれることの出来た人でした。短い生涯でしたが、豊かな生涯であったと思います。彼の生と死を通して、私たちは改めて生きることの尊さを教えられ、そして残された私たちもまた、彼のように豊かに生きていくことを教えられ、励ましが与えられたのです。彼の死は、悲しみとともに、豊かさを私たちに残しました。

与えられた自らの尊い命を、弱さを含めてそのまま受け止め、その恵みに感謝しつつ生きるとい

うことは、簡単なようで難しいものです。しかし、それが何よりも、人らしい豊かな生を私たちにもたらし、そしてそれは周囲へも拡がっていくものであることを、私たちは学びたいと思います。

「神が共におられる」

キリスト教学科長　原口尚彰

創世記、第二八章一〇章～二二節

10ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。11とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。12すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。13見よ、主が傍らに立って言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地をあなたとあなたの子孫に与える。14あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。15見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

16ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」
17そして、恐れおののいて言った。
「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」
18ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、19その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。
20ヤコブはまた、誓願を立てて言った。
「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、21無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、22わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

聖書の中において時折、神は「アブラハム・イサク・ヤコブの神」（出三・六、マコ一二・二六他）であるという言い方がされますが、今日の箇所はイスラエルの族長の一人であるヤコブに関するエピソードを伝えています。ヤコブはイサクの双子の息子の一人でしたが、双子の中では出産の

際に先に出て来たエサウの方が長子であり、ヤコブは弟とされていました（創二五・二五）。長じてエサウが狩人になり、ヤコブはテントの周りで仕事をするものとなりました。ヤコブが上手く立ち回って、エサウの長子の特権を奪い（二五・二五―三四）、さらには、長子に与えられる父親の祝福を奪ったので（二七・一八―二九）、兄のエサウはヤコブを恨んでその命を付け狙うようになりました（二七・四一）。そこことを聞き及んだ母親のリベカの勧めに従って、ヤコブは住んでいたベエル・シェバから旅立ち、メソポタミアのハランに向かうことになりました（二八・一―五）。ハランは先祖のアブラハムがかつて住んでいたところであり、その親族がまだその地に住んでいました。

ヤコブがハランに向かう途中で、ある場所に来た時に日が暮れたので、野宿することになり、路傍の石の一つを取って枕にして横になり、眠り込んで一つの夢を見ました。ヤコブが夢に見たのは天に達するような長い梯子（階段）が地面に立てられている光景であり、その上を天使が上がったり下りたりしていました（二八・一〇―一二）。すると、神がヤコブの傍らに立ってこう言いました。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって

祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこに行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（二八・一三―一五）。

夢から醒めたヤコブは、その場所を神がおられる神聖な場所としてベテル（神の家）と名付け、旅から無事に帰還できたら、その場所に神殿を建て、収入の十分の一を捧げるという誓いを立てることになります（二八・一六―二二）。

この箇所を読むといつも思い出す一つの経験があります。それは、数年前、オランダのアムステルダムにあるユダヤ人の歴史に関する博物館を訪れた時のことです。場所を探し回って夕方にそこに着いたのですが、閉館前だから、明日もう一度来るように受付の係の男性に言われました。自分は日本から来た旅行者であり、明日は日本に帰らなければならないので、短い時間であっても展示物を見せてくれと私が頼むと、それなら分かったから素早く見てくれということになりました。展示されていたのは、四〇〇年にわたるオランダのユダヤ人たちの歴史に関する資料でした。彼らの歴史に関する説明があり、かつてのユダヤ人たちの居留区やシナゴーグ（礼拝堂）の写真や、ユダヤ人たちが使っていた様々な道具や品物がありました。すなわち、最初にオランダにやって来たユダヤ人は、一五世紀末に宗教的迫害を避けるためにイベリア半島から来た人々であり、セファディと呼ばれました。その後、一七世紀には三〇年戦争の戦乱を逃れて、東欧からユダヤ人たちがオラ

ンダに移り住み、アシュケナージと呼ばれました。当時のヨーロッパでは比較的宗教的に寛容であったオランダにユダヤ人たちの居留区が出来、ユダヤ人社会が形成され、以後、オランダの社会に根付いていったのも当然の成り行きでしたが、一九四〇年代になり、ナチス・ドイツの侵攻を受けてその支配下に置かれると、状況は一変して、ユダヤ人たちの公民権は制限され、彼らの多くは強制収容所に送られて殺されました。しかし、生き残ったユダヤ人たちは戦後にユダヤ人社会を再建し、宗教生活と社会生活を続けていることが語られていました。

そこまで読んで来た時に、受付の人がやって来て、もっと面白い物があるから見せてやると言って二階の小さな部屋に案内してくれました。そこは全体が暗くなっていて、床は砂漠にしつらえてあり、一人の遊牧民の格好をした若者の人形が石を枕に寝ていました。空には満点の星が出ており、一つの梯子が地面から天に向かって垂直に立っていました。つまり、それは旧約聖書の物語の場面をユダヤ人の子供向けに演出したものであり、訪問客はヤコブの人形の横に寝そべって空と梯子を眺める格好になっていました。私がこれはヘブライ語聖書のヤコブの梯子の話だねと言うと、案内の人はその通りだと言いました。そこで、彼に今日のユダヤ人にとってこの話が何故そんなに重要なのかと聞くと、それはこの話が、私たちが何時どこにあっても神が共にいることを示している話だからだと答えました。成る程、それは一理ある話だと思いました。ユダヤ人たちは、歴史の中で何度も国を滅ぼされ、国を追われて世界中に離散する生活を続けて来ました。オランダのユダヤ人

たちも、元々は迫害や戦乱を逃れてやって来た人たちです。その人々にとって、逃れて行く先がどこであっても、神は共におられ、決して見捨てることがないというこの箇所のメッセージは大きな励ましになって来ただろうと理解出来ました。しかし、天地を創った神はユダヤ人の神であると同時に、異邦人の神でもあり、全世界の神でもあります。いつでもどこでも神が共にいるということは、ユダヤ人に対してだけでなく、世界中の人たちに開かれていると思います。特に、神の御子キリストの誕生を待ち望む待降節にあたり、インマヌエル（神が私たちと共におられる）ということの意味を改めて思い起こしたいと思います。

「キリスト教は何を伝えようとするのか」

経営学部教授　佐藤邦廣

ヨハネの手紙一、第一章三節～四節

3わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなた方もわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。4わたしたちがこれらのことを書くのは、私たちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

キリスト教は何を伝えようとしているのでしょうか。聖書は何について書いてあるのでしょうか。もし、このことを知るならば、われわれは毎日の礼拝の出席や教会に行くこと、聖書を学ぼうという動機が与えられることでしょう。

今日は、キリスト教は何を伝え、信仰とは何を信じるのか、聖書は何を伝えようとするのかを、この手紙から私が学んだことを、皆さんと共に分かち合いたいと思います。

1、この手紙の位置

この手紙は、イエスの弟子であったヨハネが、教会に向けて書いたといわれている。新約聖書の

初めにある四つの福音書の内、ヨハネによる福音書と密接に関わる手紙であるといわれています。あの宗教改革者のルターもキリスト教を知るために重要な手紙であると、高く評価している。

2、キリストを知り、神を知る

この著者のヨハネは、まず何よりも、1・2節にありますように、私たちが聞いたもの、目で見たもの手で触れたもの、命、あるいは永遠の命（2節）について伝えますと述べていて、父なる神と子なるイエス・キリストを伝えようとしている。ヨハネによる福音書17章の3節で『永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです』と述べている。

キリスト教あるいは聖書は、神が存在すること、そのことを知らせるためにイエス・キリストが神から派遣されてこの世界に現れたことを伝えることであることが分かります。そのイエス・キリストは、本当に神の子であり、人間の形をとり現れ、行動し、語り、自らを神の子である、神であるということを示した。弟子たちやその目撃者は、実際に、イエス・キリストが、神の子であり、神であったという事を、驚きをもって伝えている。

目に見えない神は、目に見える形で、イエス・キリストを派遣し、イエス・キリストを信じることによって、神が存在すること、神を信じることの必要性を示した。

そうすると、キリスト教を知るとは、イエス・キリストを知ること、つまり、イエス・キリスト

がこの世でどのように生きたのか、何を語ったのかを知ることによって、本当にイエス・キリストが、神の子であり、神であること、そして、父なる神が存在することを知ることであるということが分かります。

信仰とは、イエス・キリストが本当に神の子であり神であると、心から確信することであるといえる。新約聖書は、イエス・キリストは、どのようにして生まれ、何をし、何を語り、最後はどうなったかが書いてあり、弟子たちの手紙は、イエスの弟子がイエス・キリストをどのように理解し、どのようにイエス・キリストを伝えているかを記している。

それ故、キリスト教を知るためには、まず、聖書に書いてあることを学ばなければならない。その後で、私たち一人一人が「イエスは、神であり、神の子である」と信じるのか、信じないのかを決めなければならないことになる。礼拝で語られる色々な聖書の箇所の説教は、イエスの言葉や弟子たちが信じ伝えたことを知らせ、われわれにイエスが神であり神の子である、また父なる神が存在するということを判断させる手がかりを示し、また、「あなたは信じますか」と問いかけているといえる。

3、神は光である

ヨハネは、なぜ、神・イエス・キリストを伝えようとしているのか。3節・4節で、父なる神とイエス・キリストとの交わりを持ち、自分たちのように喜びが満ち溢れるようになるためであると

述べている。キリスト教は、神とイエス・キリストを知り、交わりを持つことによって、喜びが与えられることを伝えています。それでは、なぜ神とイエス・キリストと交わりを持てば喜びが与えられるのでしょうか。それは、神が光であるからです。5節以下に書かれているように、神が光であるとは、神が真理であり正しい方、すなわち義であるということです。11節では、われわれの世界は、闇であると書かれている。闇とは、2章11節や16節において、自分がどこに行くかを知らず、肉の欲、目の欲、生活のおごりと表現されている。われわれの世界の状況は、新聞のニュースで知るところです。光の内にとどまることは、真理と正しさがあり、2章10節にあるように互いに愛しあうことができるようになり、そこに喜びが生まれるのであることを示している。

聖書は、イエス・キリストが、悩める人間を救うために神から派遣されてこの世に来て、生き話し行動をし、神の子、神であることを示し、われわれを光の神と交わりを持つように促し、そこに喜びが与えられることを記録している書物でもある。世界の宗教であるキリスト教が本当かどうか、色々な先生の礼拝の説教を聞き、聖書を読み、興味を持って追求し、答えを見出してほしいと願うものです。

窓を開こう！

経営学部准教授　松村尚彦

マルコによる福音書、第一二章二八～三一節

28彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」29イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。30心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

ある人から、「人間の心には3つの窓がある」という話しを聞いたことがあります。

一つ目の窓は、隣人への窓です。私たちがこの窓を開くと、家族や友人など自分の周りにいる人と自分自身とを結びつけて、ともに喜びや、悲しみを分かち合えるような関係を作ることができる、そうした嬉しい可能性を開いてくれる窓です。

二つ目の窓は、自分自身への窓です。この窓は、自分自身と、心の奥深くに潜むもう一人の自分

とを結びつける窓です。この窓を開くことができれば、自分の良いところだけでなく、できれば隠しておきたいと思うような恥ずかしいところも、全部含めて、あるがままの自分を肯定し、受け入れ、そして愛することができるようになる、そのような素晴らしい可能性を開いてくれる窓です。

これら二つの窓は、私たちが愛に溢れた、より良い人生を送る上で、とても大切なものだと思います。しかし私たちは、他の人から拒否されたら怖いという思いや、自分自身の暗い側面を認めたくないという気持ちから、この二つの窓を閉じてしまうことが多いのではないでしょうか。そこで必要となるのが、三つ目の窓です。それは神様への窓、すなわち隣人をも、自分自身をも超えた存在、その存在に向けて、私たちを開いてくれる窓のことです。

こうした三つの窓が開かれたとき、私たちは普段経験することのできない経験、すなわち隣人と自分、そして世界とが、愛によってつながり、一つになったような、そんな奇跡のような経験をすることができるようになるのだと思います。数ヶ月前のことですが、テレビを見ていたら、たまたまそんな場面に出くわしましたので、少しその話を紹介することにしましょう。

それは米国の女子ソフトボールの試合でのことでした。ワシントン大学とオレゴン大学が地区決勝で対戦しており、0対0で迎えた二回表、オレゴン大学のツルスキーという選手がホームランを打った時のことです。

ツルスキー選手は、人生初のホームランだったために、喜び勇んで塁を回り始めました。しかし、

あまりに浮かれていたツルスキー選手は、一塁ベースをしっかりと踏まないまま、二塁に進んでしまったんですね。それを一塁コーチに指摘されて、急いで一塁へ戻ろうとするのですが、その時、彼女は、無理に体を捻ったために、右足の靭帯を切ってしまったのです。

その場にうずくまって立てなくなったツルスキー選手に、一塁コーチが駆け寄ろうとしますが、味方の選手の体に触ったらアウトになるというルールがあります。オレゴン大学の監督は、あわてて代走を出そうとするものの、主審からは「打者自身がホームを踏めない場合は、本塁打ではなくシングルヒットになるぞ」と注意されます。

チームメートが手助けをしたなら、ホームランは取り消されてアウトになってしまう。また、もし監督がピンチランナーを立てたなら、ホームランはシングルヒットになってしまう。そんな困惑のなかで、監督、コーチ、審判たちが、立ち往生しながら、時間だけが経ってゆきました。

その時、相手チームの一塁手であるホルトマン選手が、塁審のところにやって来て、こんなことを言ったそうです。

「あの〜、味方のチームでなく、もし私たちが、彼女を運んだら、どうなりますか？」

この思いがけない問いに、塁審はあわててルールブックをチェックしますが、対戦相手の選手が

走者を助けることを禁じるルールを見つけることはできません。

そこでホルトマン選手は、もう一人の選手と協力して、ツルスキー選手を持ち上げて、各塁を踏ませてあげながら、一歩一歩慎重にゆっくりと進み、ホームベースまで運んでゆくことになったのです。

その時、私が見ていたテレビの画面には、観客が総立ちで拍手をしているなか、二人の選手に抱えられて、ツルスキー選手がホームインする姿が写しだされていました。

このテレビの画面を見ながら、私はここで起こっていることは「恵みの出来事」としか言いようがないと思いました。そこでは、何か私たちを超えた「善良なるもの」の働きによって、戦っていた二つのチームの選手たち、審判たち、そして観客までもが、一体となって喜びを分かち合う経験をしている、そのように思えたからです。

さて、先ほどお読みした聖書の箇所にもどりましょう。イエスは、最も重要な掟は何かと聞かれて、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と答えられました。

神様というと、もしかすると抵抗を感じる人がいるかも知れません。しかし先ほどの話で言えば、何か私たちを超えた「善良なるもの」の働きによって、人々が一体となって喜びを分かち合う経験をしているところには、人がそれを意識しているか、いないかは別として、そこには、いつも神様

がおられるのだと思います。

しかし神様は、目には見えません。このため私たちは、普段の生活の中では、愛によって人々と喜びを分かち合うよりも、お金、成功、勝ち負けなど、目に見えるものや、目に見える成果を自分のものとすることを優先してしまい、神様を軽視しがちです。

その結果、私たちが本当に望んでいる、愛に満ちた生活がなかなか実現されないのです。

だから聖書は、私たち人間が「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」神様を愛すること、すなわち神様への窓を、全力を尽くして開き続けることを強く求めています。

神様への窓を開き続けることによって、私たちは隣人と共に「善良なるもの」の働きを経験する「恵みの出来事」へと導かれてゆく。聖書は、そして聖書の神様は、そのような世界に、私たちを招いていると言うことができるでしょう。

「桜切るばか、梅切らぬばか」

工学部教授　星宮　務

マタイによる福音書、第七章一二節

12だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

ルカによる福音書、第一一章五二節

52あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ。

今年は四月、新学期が始まってすぐに礼拝の担当にあたりましたので、初めに花についてのことわざをご紹介したいと存じます。

皆さんは、「桜切るばか、梅切らぬばか」ということわざをご存知でしょうか。このことわざは、「桜の枝を切ると、そこからバイ菌が入って腐って枯れるから切らない方がいいが、梅の木は適度に枝を剪定した方がよく実がなる」という意味です。それだけだと、単なる園芸の話で終わりなのですが、ここでは、少し深く意味を読み込んで考えてみたいと思います。

「桜切るばか」というのは、しなくて良いことを積極的にしすぎて失敗した例です。一方、「梅

切らぬばか」というのは、消極的にすぎてしなければならない事をしなくて失敗した例です。

仏教では「人にしてほしくないことを、他の人にするな」と言うことが、基本的な倫理であります。一方、キリスト教での人間の行動の基本原理は、本日の聖書の最初の箇所にあるように、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」と、同じ内容をより積極的な姿勢で述べております。ちょうど、「梅切らぬばか」を仏教に、「桜切るばか」をキリスト教にたとえれば、一層わかりやすく感じられることでしょう。

皆さんご存知のように、キリスト教にはプロテスタントとカトリックとがあります。私たちの学んでいる東北学院大学は、キリスト教の中でもプロテスタントの教えに基づいて建てられた大学です。その最大の特徴は、カトリックのように修道院で世の中から遠ざかって静かに瞑想をするのではなく、この世の中の生産活動と積極的に関わりながら生きていくことが最大の違いです。

プロテスタントの教えでは、人間の生きていく営みは、神の栄光を表すことだと、考えられております。ですからプロテスタントの考え方では、「自分の仕事にどれだけ忠実に生きるか、ということを貫くことがそのまま、神様のみ心にかなうことである」と私は理解しております。

マックス・ウェーバーという二十世紀最大の社会科学者の一人が、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という論文の中で、神様の栄光を表そうと個人個人が自分の仕事に忠実に励んだプロテスタンティズムを精神的なバックボーンに持つ近代ヨーロッパのみが、資本主義を生み

だすことができた事を論証した事は有名で、高校の倫理社会の教科書にも載っていることでございます。

この事を私たち大学に身を置く人間にとって、どんな意味があるかを念頭に置きながら、本日の聖書の第二の箇所を読んで見ましょう。

「ファリサイ人」や「律法学者」と呼ばれる当時のエリートたち・知識人たちを、イエス・キリストはこの箇所で、激烈な調子で非難しております。「知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ」という言葉を読む時、私は自分が大学の教員として、十分な勤めをしているか、次のような問いを自分に対して発することを余儀なくさせられるのです。

「自分は現在、大学の教員という立場に身を置いているが、一体自分は大学という高等教育に相当する十分な教育を行っているか、大学の研究者として自分がそのポストを占めるに値するだけの研究を行ってきているか、少ないスタッフで運営しなければならない大学の構成員として、十全な働きを行ってきているか？」と。

つまり、イエス・キリストが強い調子で非難している律法学者のように、教育・研究・運営の3つの面にわたって、「自分が仕事をさぼっているだけでなく、本来は自分よりも適切な人材がポストにつくべきなのを妨げている存在になっていないか」、全能者の前に立った時、本当に職業人と

しての自分に至らないところがないか、この聖書の言葉は、私自身の反省の原点になっている箇所であります。

ウェーバーの著作からわかるように、皮肉な話ですが、人間が自分で楽をしようとした結果、経済的に格段に発展した近代ヨーロッパができたのではありません。近代ヨーロッパに固有な資本主義が成立したのは、身を粉のようにして全力で、神様の栄光を表すために自分の仕事に励むという禁欲的なプロテスタンティズムの精神によって十分な蓄財ができ、その結果資本主義が成立したのです。

私たちの勉学の営みでも、同じような事があるのではないでしょうか？楽をすればするほど、私たちの能力・才能は眠ったままで、生かされません。本日の讃美歌の三百七十番で歌ったように、目をさまして一所懸命、自分の置かれている人生の陸上競技場をひた走りに走る事によって、初めて私たちの中に眠っている才能が開花し、人生のゴールまで十分な走りができると思うのです。

私たち一人一人が、自分が本当に全力で疾走し、自分の持っている才能を十分に開花させているかどうか、いま一度、自分自身に問うてみる必要があるのではないでしょうか。

祈ります。

「父なる神の眼差し」

工学部機械知能工学科准教授　長島慎二

ルカによる福音書、第二章一節～七節

1そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。3人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。4ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。6ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、7初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

クリスマスおめでとうございます。わたしの亡くなった兄が重度の精神薄弱児であったことは、これまで証をしたことがありますのでご存じと思います。わたしが小学校二年生の時、このようなこどもたちが生活することができる、いわゆる入所型の施設が故郷にできました。兄はそこに入所することになりました。おそらく両親は、わたしや弟の将来を考えて決断したのだと思います。兄

が入所して三日後、家族で兄の様子を見に行きました。暗い夜でした。まして、その施設は少し山間にありましたので、あたりには灯りのひとつもありませんでした。漆黒の闇にうずくまるように建つ施設にいくつかの窓灯りがあって、そのうちのひとつに当たりをつけて近づいていきました。そして、中に気づかれないように、窓の外からそっと覗き込みました。そこには兄の姿がありました。わたしは、いまでもその光景を忘れることはできません。そのときの両親の心情について、そのときのわたしは小さかったので推し量ることはできなかったと思いますが、今は、察して余りあります。言葉を重ねる必要はないことです。もちろん、兄は、夏休みなども含めて、毎月自宅に戻っていましたが、何も解らずに家族から引き離されて生活したことを思えば、ある意味では捨てられた子供であったということになります。

二千年前の最初のクリスマスもまた、あの日と同じように暗い夜であったと聖書は伝えています。焚き火を除いて灯りのあるはずもない野原に主の栄光があって、天使が讃美の歌を歌いました。羊飼いたちは急いでベツレヘムに行き、馬小屋を覗き込んだことでしょう。そこにはヨセフと母マリアがおり、ひとりのみどりごが飼い葉桶に寝かされておりました。羊飼いたちは、そのみどりごが天使たちが伝えたメシアであるとの確信をもって、人々にその出来事を伝えました。

確かに、そのみどりごはメシアでした。神の子でした。しかし、その赤ん坊は三十数年後に十字架に磔にされるという神のご計画の定めを負っていたのです。一体、この世のどこに、子をもうけ

るにあたって、その子の将来の幸いを願わない親などがいるでしょうか。まして、死刑台にかけるために子供をもうける親などというものがあるでしょうか。しかし、羊飼いたちが目の当たりにしたそのみどりごは、神の子であって、十字架につく定めを負っていたのです。神は、決して罪とは相容れないお方であります。その神が、罪深いこの世を愛されて、なんとかして私たちを救わんとして御子をこの世に与え賜うたのでありました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」とある通りです。

はたして、馬小屋の隙間から、みどりごに注がれた眼差しは羊飼いたちのものだけだったでしょうか。息を殺して注がれた父なる神の眼差しがあったのではないでしょうか。

今日、このクリスマスイブ礼拝もまた、寄宿舎の窓から、神の眼差しが注がれていることでしょう。わたしたちが、その眼差しを全身で感じ、その背景にある父なる神の愛を知るとき、神の救済の歴史に自らの名前が書き記されていることを悟り、また、新しい一歩を踏み出すことができるのではないかと思います。神様によってこそ、この場に集められたみなさんに神様の限りない恵みと祝福と赦しがありますように。アーメン

shining / On all your fear and pain.

2. He who was served by angels / Comes as a child to serve: For God in mercy tempers / The justice we deserve. Whoever here is guilty, / Who knows himself defiled: Look up! and find salvation / Believing in this Child.

3. How quickly night is passing - / Haste to the stable now! There you will find salvation, / The reason why and how. God from your guilt's beginning / Has heard you when you cried. Now he whom God has chosen / Is standing at your side.

4. As long as nights are falling / On human guilt and pain, The star of God's good pleasure / Will shine on travelling men. In souls lit by its radiance / The darkness cannot brood: Look up! salvation for you / Shines from the face of God!

5. God wants to live in darkness / So he can make it bright; As though he would reward it / He guides the world aright. He who created all things / Does not forsake the lost; Who trusts the Son as Saviour / Has freedom at the last.

2. Dem alle Engel dienen, / wird nun ein Kind und Knecht.
Gott selber ist erschienen / zur Sühne für sein Recht.
Wer schuldig ist auf Erden, / verhüll nicht mehr sein Haupt.
Er soll errettet werden, / wenn er dem Kinde glaubt.

3. Die Nacht ist schon im Schwinden, / macht euch zum Stalle auf!
Ihr sollt das Heil dort finden, / das aller Zeiten Lauf
von Anfang an verkündet, / seit eure Schuld geschah.
Nun hat sich euch verbündet, / den Gott selbst ausersah.

4. Noch manche Nacht wird fallen / auf Menschenleid und -schuld.
Doch wandert nun mit allen / der Stern der Gotteshuld.
Beglänzt von seinem Lichte, / hält euch kein Dunkel mehr.
Von Gottes Angesichte / kam euch die Rettung her.

5. Gott will im Dunkel wohnen / und hat es doch erhellt.
Als wollte er belohnen, / so richtet er die Welt.
Der sich den Erdkreis baute, / der lässt den Sünder nicht.
Wer hier dem Sohn vertraute, / kommt dort aus dem Gericht.

English translation by Fred Pratt Green 1903-2000
（© 1974 Stainer & Bell Ltd）

1. The night is nearly over / The daylight nearly here: With praises let us welcome / God's bright and morning star. Who suffered long in darkness / Join in the joyful strain: The morning star is

My personal message:

Christmas certainly is not only a time for eating sweet cakes and receiving nice presents. And Christmas is not only the season of plain merrimaking and rejoicing about the birth a smiling baby. The main purpose of this Christian ceremony is to put the focus of our lives on something else: As long as there is misery, there is also hope - the promise of redemption, a better life, if we invest our love into helping our fellow human beings on earth.

———

* The lyrics of the English version can be found on the internet at:

http://www.lutheranwiki.org/Jochen_Klepper).

If you want to listen to the song, you can find many different versions on "Youtube", for instance:

http://www.youtube.com/watch?v=fiWlbL6cL38

And if you want to learn more about the score of the English version with a different Welsh melody, just look it up on the internet:

http://www.smallchurchmusic2.com/Score_PDF/TheNightWillSoonBe-Llangloffan.pdf

Original German text, published by Jochen Klepper in his book of poetry "Kyrie" (1938):

1. Die Nacht ist vorgedrungen, / der Tag ist nicht mehr fern.
   So sei nun Lob gesungen, / dem hellen Morgenstern.
   Auch wer zur Nacht geweinet, / der stimme froh mit ein.
   Der Morgenstern bescheinet auch deine Angst und Pein.

into a Christian context : Jesus Christ will bring light into the world - a theme repeatedly used in the Bible. That is why the symbol of candles is used over and over again during the Christmas season.

For most of you the Christian message of God becoming a human baby does not make sense, neither does the idea of a man being killed and then coming back to life appeal to the logic and rationality of modern people. We have no written documents or scientific evidence which prove the historical truth of the birthday or the resurrection of Christ. But in the face of human suffering and natural disasters we cling to the hope of an escape from it all, as shown by Christ. That is what Jochen Klepper strongly believed: Both joy and sadness are part of our existence. You cannot have just one part without the other. Yet, in the end, night is not going to conquer light.

The original poem would probably not have become so popular in Germany had it not been for the composer Johannes Petzold（1912-1985）who shortly after the publication of Klepper's book（with contained some other religious poems）came up with a simple but wonderful melody.* The poem/song ranks high among modern German church songs and has become part of Protestant as well as Catholic hymnals after the war because of its positive Christmas message（despite deep life-threatening personal trouble）.

Stein, who had 2 daughters from her first marriage. In 1933 Hitler became leader of Germany and soon changed laws in order to disallow mixed marriages between so-called "Arian" pureblooded German and Jewish people.

Klepper did not want to divorce his wife and this is when trouble started: he lost his job and had to fight against discrimination. At the beginning of World War II he was drafted into the army - and soon dishonorably discharged because of his marriage. Finally, in December 1942, he could no longer withstand the pressure from the government, which had threatened to deport and kill his stepdaughter as well as his wife. So he committed suicide together with Johanna and the younger daughter - her sister had barely been able to leave Germany.

A tragic life indeed - and this makes Klepper's poetry even more impressive. Facing so many obstacles in his private life did not drive him away from his faith; just the opposite: it led him to seek comfort in his strong religious belief. Just to give you an idea of the main message of the song by Klepper, take a look at the English translation at the end, and there is a Japanese version in the new "Hymnal 21" as hymn No.243.

He keeps talking about darkness, human guilt, and suffering - the many problems we face in the world. But all this is counterbalanced by words about brightness: the Morning star（金星）, the belief in salvation through Jesus Christ. For this point the image of the eternal fight between the dark forces and the bright forces is evoked and put

The song became popular in France, too. Much later in 1923 it was translated into English by Richard B. Hoyle as an Easter hymn "Thine is the glory" and a Japanese version can be found in your Japanese sanbika（賛美歌 130）. Haendel's hymn is well known in Germany as part of the Christmas season and it is still sung in churches and concerts. The melody is joyous and proud - with trumpets announcing the birth of and arrival of a new king-the "King of Peace" entering Jerusalem. This melody fits and suits the usual positive and joyful mood when we are thinking of Christmas as a time of celebration. The popularity of the melody is an asset to the message it carries. But this popularity can also lead to parodies and downright mockery. That is why nowadays the melody is used even in Germany as a Carneval or merry-making song, and in Japan as a festive intonation at the beginning of a presentation ceremony, such as for the winner of a（sumo）tournament.

There are other, not so frolicsome（陽気）things that we cannot deny even during these happy days. The world is not at peace, many humans are still suffering and the outlook for the future of our planet is not too bright. This is where the second song comes in. It presents the other side of the coin, so to speak. First I have to talk about the author of the text, and his life, so you can understand, why this is a very special song.

Jochen Klepper（1903 - Dec.11, 1942）studied theology and worked as freelance writer. In 1931 he married the（Jewish）widow Johanna

ENGLISH CHAPEL SERVICE

教養学部 Frieder Sondermann（ゾンダーマン，E. F.）

READING from the SCRIPTURE：（John, chapter 8: verse 12)

Then Jesus again spoke to them, saying, "I am the Light of the world; he who follows Me will not walk in the darkness, but will have the Light of life."

Meditation: What is in a song?

Come Christmas time we hear and sing many songs about this Christian "festival". Some of them are beautiful, some are downright silly yet popular - without any connection to the Christian context of the birth of Jesus Christ. Today I would to share with you some thoughts about two songs that are dear to my heart, because they are very much part of my upbringing and bring back memories of family gatherings, where we happily sang many Christmas songs.

Maybe I should start with the older one of these two songs, because all of you have heard it and may be surprised to learn something about its origin and its use. Actually we just sang it. It is the hymn "Daughter of Zion", a composition taken from short passages in two oratorios by Georg Friedrich Haendel : "Joshua" （1747）and "Judas Maccabaeus"（1751）. These short lines in their German version were re-arranged and presented in a private circle by Friedrich Heinrich Ranke around 1820, then published in 1826.

passage we read earlier in the service is from the Old Testament book of *1 Chronicles*, chapter 25. Bach had written his own commentary on *1 Chronicles*, and at the end of his commentary he wrote that this Old Testament book contained "splendid proof that... music was instituted by the Spirit of God through David."

During Bach's life, he worked mainly as a church musician. Quite simply, he loved the world of church music. Unfortunately, at the end of his life, he had become completely blind. In 1750, he died in relative obscurity. Though it is hard for us to believe, he was even buried in an unmarked grave. Bach's accomplishments were many and varied. Though he is best known for his numerous musical compositions, we should not forget that he composed these pieces during his busy working life as an organist, conductor, music director, and teacher, and while he was raising a very large family.

Throughout his life, Bach was devoted not only to his family, but also to his work and to his God. In fact, Johann Sebastian Bach saw his work and his faith in God as, in a sense, two sides of the same coin. Indeed, through his work as a performing musician and composer, Bach honored and worshiped God.

numerous combinations of instruments and voices. He wrote cantatas, masses, oratorios, passions, concerti, and solo pieces for several different instruments. It is interesting to note that during Bach's life only ten of his original compositions were published. Actually, it was not until the nineteenth century that Bach's truly brilliant ability as a composer came truly to be appreciated.

Bach lived and worked in Germany all his life. He wrote both sacred and secular music, but his true love was writing music for the church. His life reflected his stated belief that "music's only purpose should be for the glory of God and the recreation of the human spirit." Bach was a man with a strong faith in Jesus Christ. In his thinking, he was a disciple of the great Reformation theologian, Martin Luther. Luther emphasized the importance of a Bible-based Christianity, and Bach's life demonstrated a similar conviction. When Bach composed a piece, he would often write "J.J." (*Jesu Juva* - "Help me, Jesus") or "I. N. J." (*In Nomine Jesu* - "In the name of Jesus") on the page before he began to write. And when he finished writing the piece, he often wrote the letters "S. D. G.", which meant *Soli Deo Gloria* - "To God alone, the glory". In short, Bach's faith strongly influenced his work as a musician and composer. In all he did, he was guided by his faith in God.

Bach often read the Bible and other religious books. A devoted student of Martin Luther, he had two different editions of Luther's works and many books written by followers of Luther. Bach sought to see a relation between his music and his faith. For example, the

ENGLISH CHAPEL SERVICE

キリスト教学科 David N. Murchie（マーチー，ディビッド）

SCRIPTURE：1 Chronicles 25: 1, 6-7

David, together with the commanders of the army, set apart some of the sons of Asaph, Heman and Jeduthun for the ministry of prophesying, accompanied by harps, lyres and cymbals. . . . All these men were under the supervision of their fathers for the music of the temple of the Lord, with cymbals, lyres and harps, for the ministry at the house of God. Asaph, Jeduthun and Heman were under the supervision of the king. Along with their relatives-all of them trained and skilled in music for the Lord-they numbered 288.

MESSAGE: "Making Music for God"

In our chapel service today we played a piece by Johann Sebastian Bach and later we will sing a hymn based on a melody from one of Bach's most famous compositions, the *St. Matthew Passion.* Bach was born in Eisenach, Germany in 1685. Many mem bers of the Bach family were well-known musicians at that time, and many are still well-known to us today. Johann was orphaned when he was nine years old. When Johann was young, his older brother took care of him. At an early age, Johann displayed a remarkable ability for playing organ, violin, and several other instruments. Bach became famous as an organist, but he was also a prolific composer. He composed many different kinds of pieces for

編集後記

大学宗教主任　北　博

昨年の夏は、ほぼ日本全国で記録的猛暑でした。夏は涼しいはずの仙台でさえも、まるで東京にいるような錯覚を覚えるほどの暑さでした。ところが、その記憶がまだ消えやらぬこの冬、逆に各地から豪雪と酷寒の便りが届きました。本当に、地球の気候はどうなってしまったのでしょう。

この異常気象もあるいは関係しているのでしょうか、この一年あちこちから多くの訃報が入ってきました。人間すべていつかは死ぬものだと分かってはいても、やはり別れは辛いものです。しかし、だからこそ先に天に召された人から託された「たすき」をしっかりと握って、気持ちを新たにして走り続けたいものです。

東北学院大学では、礼拝を教育の一環として重視しています。土樋キャンパス、泉キャンパス、多賀城キャンパスのそれぞれのチャペルにおいて、学期中は授業がある限り、月曜日から土曜日までの毎朝一時限目と二時限目の間に礼拝が持たれています。加えて、土樋キャンパスでは特に夜間主コースの学生のために水曜日毎に、また三つの寄宿舎でも寮生のために週一回、それぞれ夜に礼拝が持たれています。

この小冊子に収められているのは、二〇一〇年度の本学の大学礼拝で語られたことのほんの一部

です。ここには収めきれませんが、実際には多くの近隣教会の牧師先生方やキリスト者教員、そして聖歌隊の皆さんにも礼拝を担当して頂きました。改めて、お礼を申し上げます。また、礼拝の進行のお手伝いをして頂いた多くの職員の皆様方にも感謝致します。多くの方々の理解と協力に支えられて、東北学院大学において過去一二五年間欠かさず行なわれてきた礼拝を、今年もしっかり守り続けることが出来ました。

この礼拝の伝統は、たとえて言えば多くの人々の手によって引き継がれてきた駅伝の「たすき」のようなものです。この「たすき」を守りぬき、次の世代にしっかりと手渡すため、今後とも皆様の一層のお力添えをお願い致します。

大学礼拝説教集

第　十五　号

二〇一一年三月三十一日発行

発行責任者　宗教部長　佐々木哲夫

編集責任者　大学宗教主任　北　博

出　版　社　株式会社　アクトジャパン

問い合せ先　東北学院大学
宗教事務課
〒980-8511　仙台市青葉区土樋一の三の一
☎〇二二・二六四・六四二八